多民族共生社会としてのビザンツ帝国の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 根津, 由喜夫, Nezu, Yukio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00034801

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

KAKEN
2002
36
金沢大学

多民族共生社会としてのビザンツ帝国の研究

（課題番号：12610386）

平成12年度～平成14年度科学研究費補助金
（基盤研究(C)^{2}一般）
研究成果報告書

金沢大学附属図書館
0300-02141-0

平成15年4月

研究代表者　根津　由喜夫
（金沢大学文学部助教授）

多民族共生社会としてのビザンツ帝国の研究

（課題番号：12610386）

平成 12 年度～平成 14 年度科学研究費補助金

（基盤Ｃ・一般）

研究成果報告書

平成 15 年 4 月

研究代表者：　根津　由喜夫

（金沢大学文学部助教授）

目　　次

序　研究の経緯と本報告書の構成…… 2

研究活動の概要…… 3

I　1070年代のビザンツ帝国と小アジア情勢 …… 5

II　ルーセル・ド・バイユール

——小アジアにおけるフランク国家樹立構想—— …… 12

(1)　はじめに …… 12

(2)　第一段階——アナトリア全土の支配を目指して …… 16

(3)　第二段階——幻のポントス・フランク国家 …… 22

(4)　小括 …… 30

III　ニケフォロス・ボタネイアテス

——前方への逃走—— …… 32

(1)　はじめに …… 32

(2)　反乱の支援者たち …… 33

(3)　首都進軍 ……45

(4)　首都の政治情勢 ……50

(5)　小括 ……57

IV　結びに代えて …… 61

文 献 目 録 …… 64

序　研究の経緯と本報告書の構成

一千年以上に及ぶビザンツ帝国の歴史は、ある意味で多様な民族集団との絶え間ない相互交渉の歴史であったとも言えよう。欧亜２大陸にまたがる帝国の国境地帯には、相次いで様々な民族集団が姿を現し、帝国政府は彼らとの外交的な駆け引きに忙殺された。彼らの一部は帝国領内に定着し、皇帝への忠誠を誓った。

帝国が長期にわたって生命力を保つことのできた要因のひとつは、こうした新来の外的勢力に柔軟に対応し、彼らのもつ活力を帝国社会の活性化に役立てることを可能にさせる能力にあったと言っても過言ではない。

今回の研究の課題は、国土の中に様々な民族集団を抱え、時として厳しい対立や緊張関係を生みつつ、長期的には一定の安定と相互の共生システムを築くことに成功したビザンツ社会の実態をできるだけ詳細に解明することにある。ここでは、ひとつの事例研究の試みとして、対象とする時期を 11－12 世紀に絞り、以下の３つの角度からこうした主題に取り組むことを目指した。

第一の視点は、11 世紀後半、トルコ人の侵入に伴う混乱の中での小アジアの現地住民の動向を、当時、この地域で勃発した反乱の過程を分析することによって明らかにすることである。小アジア内の異なる地域でほぼ同時期に発生した複数の反乱を相互に比較することにより、それぞれの地域が抱えた特殊事情や、地域の枠組みを越えた当時の小アジアの全般的な情勢などがそこから浮かび上がらせることができるのではないだろうか。

第二の視点は、11 世紀末から 12 世紀初頭のバルカン半島、とくにテッサロニケ周辺の地域における社会構造を、主としてアトス山修道院文書の分析を通じて解明することである。この時期、この地域にはトルコ人に故郷を追われた小アジア出身の貴族家門が多く移住している。ここでは彼らが現地社会に同化してゆく過程で生じた様々な軋轢が解決されてゆくプロセスを、修道院に残された訴訟・係争関係文書を読み解きながら解明することが意図されている。

最後に第三の視点は、西欧勢力の大規模な東地中海沿岸地域への進出が始まった 12 世紀において、ビザンツが国家の内外においてこうした勢力にいかに対処したかを考察するものである。

第二、第三の視点については、右に示したようにすでに公刊の手続きを終えているため、本報告書では、第一の視点をめぐる論考のみを掲載することにした。

交付された補助金のおかげで、今回の研究を進めるにあたり、ギリシア、マケドニア、ブルガリア、トルコへ調査旅行を実施することができた。主に文献資料に拠るこの研究に多少の精彩が与えられたとすれば、それはこの旅の成果である。

研究活動の概要

研究種目　：　基盤Ｃ　一般（２）

研究期間　：　平成 12 年度～平成 14 年度

課題番号　：　12610386

研究課題名　：　多民族共生社会としてのビザンツ帝国の研究

研究代表者　：　根津 由喜夫　（金沢大学文学部助教授）

交付決定額（配分額）

平成 12 年度	１，４００
平成 13 年度	１，６００
平成 14 年度	６００　千円
総　計	３，６００　千円

研究発表（学会誌等）

1. 根津由喜夫「ビザンツ属州行政と名望家層――コムネノス朝期のテッサロニケ地域を中心に――」『金沢大学文学部論集 史学・考古学・地理学篇』21 号、2001 年 3 月、1－34 頁

2. 根津由喜夫「十字軍時代のビザンツ帝国」　歴史学研究会編『地中海世界史』２〈多元的世界の展開〉、青木書店、2003 年 4 月（刊行予定）70―105 頁

I　1070年代のビザンツ帝国と小アジア情勢

1071年8月のマンツィケルトの会戦でビザンツ軍は大敗を喫し、軍の先頭に立って奮戦した皇帝ロマノス4世ディオゲネス(在位1068－1071)は、敵のスルタン、アルプ・アルスランの捕囚となった。[1]

ビザンツ帝国にとっての悲運はこれだけでは終わらなかった。スルタンと和を結んで自由を回復したロマノス4世と、首都コンスタンティノープルで新たに発足したミカエル7世(在位1071－1078)の政権の間で内戦が勃発し、小アジアを舞台にビザンツ軍同士が激しい戦闘を繰り広げたのである。[2]

この戦いにおいて、ロマノス4世は、彼の出身地であるカッパドキア地方の軍団と東部国境地帯のアルメニア人たちの支持を得る一方で、ミカエル7世は、首都周辺に駐屯する外人傭兵部隊と小アジア西部の軍勢を拠り所にしていたしていたように思われる。結局、この内戦は、ミカエル7世陣営に味方したフランク人傭兵部隊の活躍もあり、新政権側の勝利に終わった。

発足当初のミカエル7世政権を事実上、主導していたのは皇帝の叔父、カイサルのヨハネス・ドゥーカスであった。[3]　カイサルの2人の息子アンドロニコスとコンスタンティノスは軍と宮廷の要職を占め[4]、ロマノス4世との内戦では新政権

---

[1] この会戦に関しては、さしあたり、以下の文献を参照のこと。A.Friendly, *The Dreadful Day: The Battle of Mantzikert,1071,* London,1981,esp.pp.163-192; J. Haldon,*The Byzantine Wars: Battles and Campaigns of the Byzantine Era,* Stroud,2001,pp.112-127.

[2] シェネは、マンツィケルトの会戦自体よりも、その後の内戦の方が、ビザンツ軍に多大な人的被害を出したと推定している。 J.-C.Cheynet,"Mantzikert. Un désastre militaire?",*Byzantion,* 50,1980,pp.410-438,p.432f.　なお、ロマノス4世とドゥーカス家の権力闘争に関しては、マンツィケルト会戦以前の政局の推移を含めて、筆者は別稿で検討を加える予定であるが、現時点では、Sp.Vryonis Jr.,*The Internal History of Byzantium during the 'Time of Troubles' (1057-81),* Ph.D.thesis,Harvard University,1956,pp.89-110 を参照されたい。

[3] 彼は兄コンスタンティノス10世の治下（1059－1067）に皇帝自身に次ぐ最高の宮廷爵位であるカイサルの称号を授けられていた。 拙稿「イサキオス1世とコンスタンティノス10世の治世をめぐって――過渡期のビザンツ皇帝政権――」、『史林』80巻5号、1997年、1－37頁、特に11頁。 cf.D.I.Polemos, *The Doukai, A Contribution to Byzantine Prosopography,* London,1968,no.13,pp.34-41; B. Skoulatos,*Les personages byzantins de l'Alexiade. Analyse prpsopographique et synthèse,* Louvain,1980,no.88,pp.138-145.

[4] 2人の爵位はいずれもプロートプロエドロス。アンドロノコスはこれに加えてプロートヴェスィアリオスと東部方面軍最高司令官（ドメスティコス・トーン・スコローン・テース・アナトレース）の職務を帯び、弟のコンスタンティノスはプロートストラトールと小アジアの筆頭テマであるアナトリコンの長官職を兼任

軍の司令官として出陣して、戦いを勝利に導くのに大きく貢献した。

内戦が終結した後、カイサル父子に代わって政権の実験を握った外務・駅逓長官(ロゴテテース・トゥ・ドロムゥ)の宦官ニケフォリツェス[5] は、急激に悪化しつつあった事態の中で国家の防衛態勢を立て直すためにあらゆる手段を尽くした。

彼はまず、イサキオス 1 世(在位 1057－1059)に代わってコンスタンティノス 10 世が登位して以来、軋轢が続いていた有力な軍事家門コムネノス家との関係修復を図った。[6] 1072 年の夏、彼らは流刑先のプリンキポ島から呼び戻され、和解の証としてコムネノス家のイサキオスと皇帝ミカエル 7 世の妃マリア・アラニアの従姉妹エイレーネーとの間で婚儀が交わされた。[7] 1078 年初めにはイサキ

している。 G.Zacos and A.Veglery,*Byzantine Lead Seals,* vol.1,Basel,1972,no. 2692,pp.1471-1473(アンドロニコス); W.Seibt,*Die byzantinischen Bleisiegel in Österreich,1 Teil, Kaiserhof,* Wien,1977,Nr.36,S.128-131.(コンスタンティノス) なお、プロートヴェスィアリオス職は、本来、皇帝の家産管理を管掌する高位の宮廷宦官用の官職だったが、11 世紀後半以降、このアンドロノコスを皮切りに、皇帝一門の有力貴族に付与される一種の名誉称号化した。 cf.A.Kazhdan, "Protovestiarios", in A.Kazhdan ed., *The Oxford Dictionary of Byzantium,* Oxford, 1991, p.1749. 他方、プロートストラトールは、もともとは皇帝の乗馬を管理し、彼が外出する際には騎馬で護衛する馬丁長官に相当する官職だったが、9 世紀以降、重要性を増し、11 世紀中葉以降は実質的に軍内でドメスティコスに次ぐナンバー 2 のステータスを占めるようになった。 cf.A. Hohlweg,*Beiträge zur Velwaltungsgeschichte des Oströmischen Reiches unter den Komnenen,* München,1965,S.111-117.

[5] 宦官ニケフォリツェスに関しては、さしあたり、拙稿「ライデストス穀物専売政策をめぐって――11 世紀ビザンツの国家と官僚――」、『史林』70 巻 1 号、1987 年、44－72 頁、特に 50－60 頁、および P.Lemerle,"Byzance au tournant de son destin", dans P.Lemerle,*Cinq études sur le XIe siècle byzantin,* Paris, 1977, pp.249-312, pp.300-302 を参照のこと。

[6] 当時、コムネノス家を実質的に主導していたアンナ・ダラッセナ（イサキオス 1 世の弟ヨハネスの寡婦）は、義兄の退位時に夫のヨハネスではなく、コンスタンティノス・ドゥーカスが後継者に選ばれたのは、ドゥーカス家、特にコンスタンティノスの弟ヨハネスの策謀のためであると考えて、同家に強い嫌悪感を抱いていた。ミカエル 7 世とロマノス 4 世との間で内戦になった際も、ダラッセナはロマノス方と通じる動きを示して、息子たちと共にマルマラ海のプリンキポ島に流された。 Nikephoros Bryennios,*Historiarum libri quattuor,* éd.,P. Gautier,Bruxelles,1975,pp.128-131,p.220f;B. Skoulatos,*Les personages byzantins de l'Alexiade,* no.14,pp.20-24,p.20f.

[7] Nikephoros Bryennios,p.142f. イサキオスは故ヨハネスとアンナ・ダラッセナの次男。当時、長兄のマヌエルはすでに病没していたので、彼は同家の最年長の男子だった。なお、この結婚の日付については、D.Polemis,"Notes on Eleventh Century Chronology",*Byzantinische Zeitschrift,* 58,1965,pp.60-76,p.65f. また、イサキオスの花嫁のグルジア皇女については、P. Gautier, "La curieuse ascendance de Jean Tzetzès", *Revue des Études byzantines,* 28, 1970, pp,207-220, p.212 を参照。

オスの弟アレクシオスとカイサル、ヨハネスの孫娘エイレーネーとの結婚も取り決められた。[8] この後、イサキオスとアレクシオスのコムネノス兄弟は、カイサルの息子たちに代わって主要な軍事官職を占め、ミカエル7世政権を軍事面から支える役割を担うことになる。[9]

このほかにもニケフォリツェスは多くの有力な軍事貴族を各地の指揮官職に任用した。とりわけ、小アジアのアナトリコン長官、ニケフォロス・ボタネイアテスやバルカンではアドリアノープル長官のカタカロン・タルカネイオーテス、ブルガリアからデュラキオンの長官に転じたニケフォロス・ブリュエンニオスなど、従来の慣行に反して、それぞれの任地の近隣に本拠をもつ貴族たちに地域防衛の責任が委ねられているのが目を引く。[10] このことは、J.-C.シェネが指摘しているように、地域社会に声望を持つ有力貴族に現地の防衛を委ね、彼らと在地の軍隊との間に存在した絆を重視して、それを地域の防衛に活用しようとした中央政府の意向を反映させたものと言えるだろう。[11]

こうした方策に加え、当時、いかなる手段によってであれ、城塞を保持する者に終身でそれを所有する法令を発布する[12] など、ニケフォリツェスの防衛政策は、苦しい財政事情の中で国家が積極的な軍事政策を遂行することが困難になる[13]

---

[8] Nikephoros Bryennios,p.234f

[9] イサキオスは、アンドロニコス・ドゥーカスに代わって東部方面軍総司令官、ついで東部国境の要衝アンティオキアの長官に任命された。 Nikephoros Bryennios,pp.146f,200-207; Michael Attaleiates,*Historia,* ed.I.Bekker,Bonn, 1853, p.183. 彼が当時、プロートプロエドロスの爵位を帯びていたことは、現存する彼の印章から確認できる。G.Zacos and A.Veglery,*Byzantine Lead Seals,* vol.1, no.2701,pp.1486-1488; J.-C.Cheynet,C.Morrisson et W.Seibt, *Les sceaux byzantins de la collection Henri Seyrig,* Paris,1991,no.162,p.119f.

他方、アレクシオスはプロエドロスの爵位を帯び、ドメスティコスに準じる高位の軍事官職であるストラトペダルケスの地位を与えられている。Nikephoros Bryennios,p.182f; Michael Attaleiates,p.199.

[10] 従来、コンスタンティノープルの中央政府は、属州貴族を地方の軍事行政官職に任命する場合には、彼らが公権力を利用して中央からの自立傾向を強めることを警戒して、意識的に彼らの本拠地から離れた地域に任用するのが通例になっていたのである。 cf.H.Glykatzi-Ahrweiler,"Recherches sur l'administration de l'empire byzantine aux IXe-XIe siècles",*Bulletin de correspondance hellenique,* 84,1960,pp.1-109,p.44.

[11] J.-C.Cheynet, *Pouvoir et contestation à Byzance (963-1210),* Paris, 1990, p.350.

[12] F.Dölger und P.Wirth, *Regesten der Kaiserurkunden des oströmischen Reiches,* vol.2, 2Aufl. München, 1995, Nr.1012, S.68; N.Oikonomides, "The Donation of Castles in the Last Quarter of the 11th Century", *Polychronion. Festschrift Franz Dölger zum 75 Geburtstag,* Heidelberg,1966,pp.413-417.

[13] ニケフォリツェスが中央の軍事力を強化するために実行できたのは、小アジアからの難民を集めて「アタナトイ」(不死隊) と称する軍隊を編制することだけだ

中で、地域社会の中で現地有力者がもつ勢威を追認し、地域防衛の責任を彼らの自主的な努力に委ねようとする姿勢が顕著に認められるのである。

こうした政策は、確かに、防衛の担い手の側に、自己の故郷、家族、財産を守る、という強烈な動因が存在し、それが戦意高揚に容易に結びついた、という点で、有効な手段であったのは間違いない。しかし、それは同時に、地方社会が中央政府の統制を脱し、自立的姿勢を強めさせる作用があったことも事実である。

実際、ミカエル7世の治下には帝国各地で反乱が勃発する。そして現実にそうした反乱の主導者の多くがミカエル7世によって任命された軍司令官たちであった。バルカンではデュラキオン長官のニケフォロス・ブリュエンニオス[14]、小アジアではアナトリコン長官のニケフォロス・ボタネイアテスの例が代表的である。この他、小アジア東南部国境地帯では前帝ロマノス4世配下の将軍だったフィラレトス・ブラカミオスが大規模な反乱を起こし、また小アジア北東部を中心にフランク人傭兵隊長ルーセル・ド・バイユールが自立した国家の建設を企てている。

この時代の小アジアは、農村部を掠奪しながら移動するトルコ人集団と、中央政府に叛旗を翻した軍勢が各地に姿を現し、社会不安が蔓延した状況にあった。そうした一種の極限状態の中で展開された多くの反乱を研究することによって、我々は、こうした危機的状況の中で生き抜こうとするビザンツ領小アジアの人々の姿を浮かび上がらせることができるのではないだろうか。というのも、そうした一連の反乱は、中央と地方の間に存在した矛盾を顕在化させるだけではなく、その過程を詳細に分析すれば、平時には決して史料に現れない地域社会の中の人的結合関係や社会構造を垣間見させてくれる可能性もあるからである。

以下の分析は、同時代、ないしは一世代ほど後のビザンツ著述家の歴史記述を主たる情報源としている。それらはいずれも首都で生活する支配エリートの手になるものであり、その記述に彼らの価値観が色濃く反映されていることは疑いない。しかし、それらを丹念に読み解く中で、地方に生きる人々の思いや行動に関する断片的な情報を繋ぎ合わせてゆくことはできないだろうか。

また、同じ時期に異なる地域に勃発した反乱を比較、検証することができれば、地域ごとの特性を明らかにしたり、あるいは相互に何らかの共通性が認められる場合には、地域の枠を超えた時代的な特徴を拾い上げたりすることも可能になる

った。Nikephoros Bryennios,p.264f

[14] ニケフォロス・ブリュエンニオスの反乱に関しては、さしあたり、拙稿「11世紀ビザンツ属州貴族と地域社会、皇帝政府——アドリアノープルとマケドニア貴族をめぐって——」、『歴史学研究』 651号、1993年、46－59頁、特に53－57頁、を参照。

のではないだろうか。

そこで、以下では、こうした反乱の中で、地域的なバランスに配慮して、ルーセル・ド・バイユールとニケフォロス・ボタネイアテスの２つの反乱を取り上げ、その経緯を検証した後、最後に両者を比較して、それぞれの特徴を確認する、という手続きを取ることにしたい。[15]

まず、具体的な考察に入る前に反乱以前の２人の経歴を簡単にまとめておこう。

ルーセル・ド・バイユール[16]

ノルマンディー地方バイユール出身のフランク人傭兵隊長。[17] 1069 年、ロベール・ギスカールの弟ロジェールのシチリア征服戦に参加した後、バルカン半島に渡り、ビザンツ皇帝に仕えるようになったらしい。[18] 彼は 1071 年、皇帝ロマノス４世の東方遠征に参加した際、皇帝の本隊から離れて、ヨセフ・タルカネイオーテスと共にアルメニア地方のクレアトの町の攻囲を命じられた。しかし、トルコ・スルタンの軍が現れたという知らせを受けると、彼は、タルカネイオーテスと共に、本隊への合流を命じた皇帝の指令を無視して安全な場所へと撤退し、

---

15 本来、小アジアの地域的バランスを考慮すれば、北東部のルーセル・ド・バイユールと中西部のニケフォロス・ボタネイアテスに加え、東南部のフィラレトス・ブラカミオスの反乱の分析も行うことが望ましいのは明らかである。しかし、本稿では紙幅と時間的な制約の中で、遺憾ながら、それについては独自の考察を行うことができなかった。フィラレトスの反乱については近い将来に別稿を期す予定だが、今はさしあたり、C.J.Yarnley,"Philaretos: Armenian Bandit or Byzantine General?", *Revue des Études armeniennes.N.S.,* 9,1972,pp.331-353 を参照されたい。

16 cf.C.M.Brand"Roussel de Bailleul",in A.Kazhdan ed.,*The Oxford Dictionary of Byzantium,* p.1814f.

17 彼がノルマンディー地方バイユールの出身であったという通説は、1060 年代にシチリアに姿を見せるルーセル・ド・バイユールなる人物と 1071 年にビザンツに登場するルーセル（ギリシア語表記では「ウルセリオス」）とが同一人物である、という前提に基づいているが、ビザンツ側史料には彼の出身地や素性は一切、論及されていない。 cf.L.Bréhier,"Les aventures d'un chef normand en Orient au XIe Siècle. Roussel de Bailleul", *Revue des cours et conferences,* 1912, pp.172- 188,p.176f. ただし、あえてこの通説を否定する証拠もないため、ここでは従来の見解に従っておく。

18 モンテカッシノのアマトゥスによれば、ルーセルは、「スラヴォニアの地」を征服して、ビザンツ皇帝に奉仕することになったという（ただし、筆者は以下に収録された英訳しか参照できなかった。*The Normans in Europe,* Translated by E. van Houts, Manchester, 2000, p.267)。 シュランベルジエは、これをバルカン半島のペチェネグ人かウゼ人に対する軍事活動であると考えている。 G. Schlumberger, "Deux chefs normands des armées byzantines au XIe siècle. Sceaux de Hervé et de Roussel de Bailleul", *Revue historique,* 16, 1881, pp.289-303.

ビザンツ軍の敗北に間接的に手を貸す結果となった。[19] その後のロマノス 4 世とミカエル 7 世との間の内戦の間、彼は同郷のロベール・ド・クリスピンの配下にあったと思われる[20] が、後者の死と共に、フランク人傭兵隊長の地位を引き継いだのである。

ニケフォロス・ボタネイアテス[21]

10 世紀、「征服の時代」を代表する有名な軍事家門フォーカス家[22] の後裔を称する有力な軍事貴族。本拠は小アジア、フリュギア地方のランペの町にあった。史家ミカエル・アッタレイアテスによれば、ニケフォロスの祖父で同名のニケフォロスは、バシレイオス 2 世帝(在位 976-1025)の「大将軍」('αρχιστράτηγος)であり、父のミカエルは、ブルガリアとアブハジア(グルジア)で軍指揮官として活躍した人物だったという。[23] 他方、ヨハネス・スキュリツェスの史書には、ニケフォロスとミカエルの父子の記述は見当たらず、それに代わって、テッサロニケ長官のテオフュラクトス・ボタネイアテスとミカエルの父子が登場している。[24] 息子の名が共通しており、いずれもがブルガリア戦に従事していることなどを鑑みれば、ここで問題となっているのは同一の親子である可能性が高いと思われる。おそらくアッタレイアテスは、長男には父方の祖父の名を付ける、という当時の慣行[25] を前提に、ニケフォロス・ボタネイアテスの祖父の名前を当て推量したのだろう。[26] いずれにせよ、ボタネイアテス家の成員はいずれも軍人としてのキ

---

19 Michael Attaleiates,pp.148-150,158.

20 Nikephoros Bryennios,p.146f

21 cf.C.M.Brand and A.Cutler,"Nikephoros Ⅲ Botaneiates", in A.Kazhdan ed., *The Oxford Dictionary of Byzantium,* p.1479.

22 フォーカス家に関しては、さしあたり、拙稿「10 世紀小アジア貴族の世界」、『古代文化』41 巻 2 号、1989 年、22－37 頁、特に 26－32 頁、および、J.-C.Cheynet,"Les Phocas " ,dans G.Dagron et H.Mihăescu éd.,*Le traité sur la guerilla (De velitatione) de l'empereur Nicéphore Phocas (963-969),* Paris,1986,pp.289-315. を参照。

23 Michael Attaleiates,pp.229-236.

24 テッサロニケ長官テオフュラクトス・ボタネイアテスは 1019 年、ブルガリア人との戦いで戦死し、その後任に息子のミカエルが就いた。 Ioannes Skylitzes, *Synopsis Historiarum,* ed.,H.Thurn,Berlin,1973,pp.350-352.

25 cf. J.-C.Cheynet, "L'anthroponymie aristocratique à Byzance", dans M. Bourin, J.-M.Martin et F.Menant éd.,*L'anthriponymie : document de l'histoire sociale des mondes méditerranéens médievaux,* Rome, 1996, pp.267-294, pp.282-284.

26 H.-J. クーンも、テオフュラクトスの名をアッタレイアテスが誤ってニケフォロスと伝えている、という見解を示している。 H.-J.Kühn,*Die byzantinische Armee im 10. und 11.Jahrhundert. Studien zur Organization der Tagmata,* Wien,1991,S.211.

ャリアを積んでいたらしく、このほかにも、「レオン・ボタネイアテス、プロートスパタリオスかつデュラキオンのストラテーゴス」という印章が現存している。[27]

ニケフォロス自身は、コンスタンティノス９世モノマコス帝の治下（1042 - 1055）に初めて史書に登場する。彼はこのとき、バルカン半島でペチェネグ人と戦う軍指揮官の地位にあった。[28]

1057 年のイサキオス・コムネノスの反乱の主要な支持者の一人であった彼[29] は、反乱の成功に伴って成立したイサキオス 1 世とその後のコンスタンティノス 10 世の治下にも順調に栄達を重ね、テッサロニケ、ブルガリア、アンティオキアなどの長官職を歴任、爵位もマギストロスからプロートプロエドロスに上昇している。[30] この間、史家アッタレイアテスの記述を信じることができるとすれば、コンスタンティノス 10 世帝が死去した際には、一時、後継皇帝の候補として彼の名が挙がったこともあったという。[31] ミカエル 7 世治下には、前述のニケフォリツェスの政策もあり、本拠のフリュギア地方を含むテマ・アナトリコンの長官職を占め、爵位は皇族格のクロパラテスに達した。この時点で彼は、帝国で最も令名高い軍人の一人であったことは疑い得ない。[32]

以上のようにルーセルとボタネイアテスは、同じビザンツ軍に属する高級軍人としてほぼ同じ時期に皇帝に反乱を起こした、という共通点はあるものの、一方は異邦人の傭兵隊長、もう一方はビザンツ生粋の名門貴族の出身、と対照的な社会的性格を帯びていた。以下では彼ら２人の反乱の経緯を追いつつ、そこに浮かび上がってくる危機に直面した小アジア社会の実像を追究する作業に移ることにしよう。

---

[27] J.Nesbitt and N.Oikonomides ed., *Catalogue of Byzantine Seals at Dumbarton Oaks and in the Fogg Museum of Art,* vol.1,Washington,D.C.,1991,no.12.9, p.43f. デュラキオンの長官職は、1042 年以降、カテパノ、ないしドゥクスと称するようになるから、レオンの在任時期はそれ以前ということになる。cf. J.-C. Cheynet, "Du stratège de thème au duc : Chronologie de l'évolution au cours du XIe siècle ", *Travaux et Mémoires,* 9,1985,pp.181-194,p.192. おそらく彼は、ニケフォロスの祖父か父、いずれかの世代に属していたのであろう。

[28] Michael Attaleiates,pp.39-43. N.バネスクは、当時、ニケフォロスはテマ・ブルガリアの長官職にあったと考えている。 N.Bănescu,*Les duchés byzantins de Paristrion (Paradounavon) et de Bulgarie,* Bucarest,1946,pp.141-143.

[29] Ioannes Skylitzes,p.488,p.495f; Michael Attaleiates,p.56.

[30] 彼の官職経歴は、現存する印章資料に基づいてほぼ完全に復元することが可能である。詳しくは、G.Zacos and A.Veglery, *Byzantine Lead Seals,* vol.1, no. 2686-2690bis, pp.1462-1468. を参照。

[31] Michael Attaleiates,p.96f.

[32] 彼と縁戚関係にあった諸家門については、後に彼の反乱支持者の構成を考察する際に詳しく論じる予定である。

II　ルーセル・ド・バイユール

——小アジアにおけるフランク国家樹立構想——

(1)　はじめに

1073 年、フランク人傭兵隊長ルーセル・ド・バイユールは、配下の 400 人のフランク兵を率いてビザンツ軍を離脱、独自の支配地域獲得に乗り出した。[1]

これまでの通説によれば、こうした西欧系傭兵[2] の行動は、トルコ人の小アジア侵攻を始めとする深刻な対外危機に直面していたビザンツ帝国において、内部から国家の解体を助長させる動きとして批判的な視線に晒されることが多かったように思われる。

たとえばP．カラニスは 11 世紀のビザンツ史を概観した彼の論考において、当時のビザンツ軍が多種多様な外人傭兵部隊を含んでいたことを指摘した上で「これらの傭兵は、帝国の利害よりも彼ら自身の利害に従って動き、彼らが加えた損害は、彼らの提供した奉仕よりもはるかに大きかった」と語っている。カラニスによれば、こうした外人傭兵の中でも「最も乱暴で御し難いのがノルマン人」であり、多くの反抗的なノルマン人傭兵隊長の中でも「特に野心的で多くの惨禍をもたらしたのがルーセル・ド・バイユールだった」ということになる。[3]

こうした外人傭兵とその首領に対する否定的な評価は、ビザンツ中期のテマ農兵にある種の近代的な国民軍の姿を見て、彼らの国家防衛の取り組みを英雄的事業として高く評価したG．オストロゴルスキー以来の学説[4] と表裏一体の関係に

---

[1] Michael Attaleiates, *Historia,* ed.,I.Bekker, Bonn, 1853, p.163;　Nikephoros Bryennios, *Historiarum libri quattor,* éd., P.Gautier, Bruxelles, 1975, pp. 146-149.

[2] 11 世紀にビザンツに仕えた西欧系傭兵に対し、同時代のビザンツ著述家たちは「ケルト人」、「フランク人」、「ゲルマン人」、後には「ラテン人」など様々な呼称を相互に厳密な区別もなく使用している。それゆえ以下では煩瑣になるのを避けるため、原文からの引用を除き、民族的出自が明確でない西欧系傭兵については、史料中で使用頻度の高い「フランク人」という呼称で統一することにしたい。なお、こうした西欧系傭兵の呼称については、後掲カジュダン論文（註７）で検討が加えられているので併せて参照されたい。

[3] P.Charanis,"The Byzantine Empire in the Eleventh Century",in K.M. Setton ed.,*A History of the Crusades,* 2ed.,vol.1,Madison,1969, pp.177- 219,p.200f.

[4] cf. G.Ostrogorsky, "Die Perioden der byzantinischen Geschichte", *Historische Zeitschrift,* 163,1941,S.229-254; P.Charanis,"Economic Factors in the Decline of the Byzantine Empire",*Journal of Economic History,* 13, 1954, pp.412-424,

あったことは間違いないだろう。

こうした状況においては、こうした西欧系傭兵とその首領たちに関する研究も、それを自分たちの父祖たちの歴史的偉業と捉えた19世紀末から20世紀前半までのフランス人史家たちの数篇の論文[5]を除けば、久しく低調であったことも不思議ではないだろう。[6]

ところが最近、中期ビザンツ国家にある種の近代国家の理想像を投影するかのような議論が次第に退潮傾向を示すようになってきたことと時を同じくするようにして、西欧系の外人傭兵たちに対する再評価の動きも生じつつあるように思われる。J.シェパード、J.-C.シェネ、A.カジュダンといった当代を代表する研究者たちが 1990 年代以降、相次いで西欧系傭兵を主題とした論文[7]を公刊しているのもこうした傾向を裏付けていると言えるだろう。特にJ.シェパードは、西欧系の傭兵はその奉仕に見合った俸給さえ支払われている限り、充分に信頼できる優秀な戦闘集団だったことを主張して、彼らの名誉回復に努めている。[8]

これに加え、J.シェパードは、もうひとつ注目すべき指摘を行っている。彼によれば、11世紀のフランク人傭兵隊長たちは小アジア北東部、テマ・アルメニアコンに所領や城塞を所有し、この地域ととりわけ深い結び付きを有していたというのである。[9]

シェパード自身はそうした事実が確認できることを指摘するにとどまり、それ

---

pp. 414-419

[5] G.Schlumberger,"Deux chefs normands des armées byzantines au XIe siècle. Sceaux de Hérve et de Roussel de Bailleul",*Revue historique,*16,1881,pp. 289-303 ; L.Bréhier,"Les aventures d'un chef normand en Orient au XIe siécle, Roussel de Bailleul", *Revue des cours et conférences,* 1912, pp.172-188 ; R. Janin,"Les <Francs> au service des Byzantins",*Echos d'Orient,* 29,1930,pp.61-72.

[6] そうした中で S.Vryonis,Jr.,*The Internal History of Byzantium during the 'Time of Troubles' (1057-81),* Ph.D.thesis, Harvard University, 1956,pp.119-135 は、例外的にフランク人傭兵隊長の活動を詳細に報じている。しかし、彼らの行動を帝国内部の撹乱要因と位置付ける点においては、ヴリョニスも当時の主流的な見解から大きく隔たってはいなかった。

[7] J.Shepard,"The Use of the Franks in Eleventh-Century Byzantium", *Angro-Norman Studies,* 15,1993,pp.275-305; J.-C.Cheynet,"Le rôle des Occidentaux dans l'armée byzantine avant la Première Croisade",in E.Konstantinou ed., *Byzanz und Abendland im 10. und 11. Jahrhundert,* Köln,1997,pp.111-128 ; A. Kazhdan,"Latins and Franks in Byzantium: Perception and Reality from the Eleventh to the Twelfth Century", in A.E. Laiou and R.P.Mottahedeh eds.,*The Crusades from the Perspective of Byzantium and the Muslim World* , Washington,D.C.,2001,pp.83-100

[8] J.Shepard,"The Use of the Franks",pp.282-296.

[9] *ibid.,*p.287f.

以上の詮索を行っていないが、この問題は、P.マグダリーノによってさらに敷衍されることになった。後者によれば、フランク人の傭兵隊長の所領がアルメニアコンに集中しているのは単なる偶然ではなく、ビザンツ側の戦略的判断に基づいた結果だったのである。すなわち、マグダリーノが推測しているところによれば、11 世紀前半にビザンツ帝国に国土を併合されたアルメニア系君侯がビザンツ皇帝からカッパドキア地方を中心に小アジア各地に広大な所領を授けられたのと同様に、フランク人の首領たちがアルメニアコンに所領を授けられたのは、彼らをこの地域に定着させることで彼らのもつ武力を地域の防衛に役立てるためだったのである。[10]

こうした視角に着目すれば、一般にビザンツ皇帝に対する重大な背信行為と見なされてきたルーセルの反乱も、従来とは異なる方向から解釈することが可能になってくる。それは、確かにビザンツ中央政府の立場に立てば、明らかに反逆行為であり、同時代のビザンツ史家たちの記述も、そうした見方を当然の所与のごとくに筆を進めている。ところが、それをルーセルらフランク人側から眺めたならば、彼らのいわゆる「反乱」は、彼らが長い時間をかけて築き上げたアルメニアコン地域の支配の枠組みを最終的に完成させようとする取り組みであった、と解釈することができるのである。しかも、こうした彼らの取り組みには、後に見るように、現地住民の一定の支持と協力が認められるのであり、その限りで彼らの「反乱」は現地社会の利害ともかなりの部分で一致していたと考えることもできるのである。

以下では、ここで示されたシェパードやマグダリーノの議論を受けて、小アジア北東部アルメニアコン[11] における地域社会の防衛体制の構築、という視角からルーセルの反乱に再検討を加えることを課題にしたい。

彼の反乱については、先に挙げた諸研究に加え、J.ホフマンによる研究がすでに 1970 年代に公刊されている。[12] だが、彼の研究は、ルーセルの反乱をビザンツ帝国からの分離運動の先駆と見なす、当時としては注目すべき着想を示しなが

---

[10] P. Magdalino, "The Byzantine Army and the Land: From *Stratiotikon Ktemata* to Military *Pronoia*",in *Byzantium at War (9th-12th c.),* Athens,1997, pp.15-36,esp.pp.26-32.

[11] ビザンツの著述家は、古典期の著作に範を置き、同時代の地名や民族名を古典期の作品内で見出される呼称に言い換えて記述する傾向が強い。アルメニアコンを示すのにニケフォロス・ブリュエンニオスがしばしば「ポントス」という呼称を用いているのはこの例である。本稿においても、以下においてこれら２つの用語を互いに交換可能な同義語として用いているのでその点に留意されたい。

[12] J. Hoffmann, *Rudimente von Territorialstaaten im Byzantinischen Reich (1071-1210),* München,1974,S.13-20,80-82,109f.118f.128f.

ら、遺憾なことに、ルーセルの行動を支えた現地社会の動向については充分な検討を加えることはなかったように思われるのである。

そこで以下では、こうした先行研究における空白を埋めるため、ルーセルの反乱行動の経過を追いながら、彼が築こうと企てた支配体制の特質を究明し、彼の挫折が小アジアの現地社会に及ぼした影響を解明することに努めることにしたい。

その際、ルーセルの反乱は、時期的に大きく2つの段階に区分され、それぞれ別個に考察すべきことを確認しておく必要があるだろう。すなわち、第一の段階は、ルーセルの反乱が思いがけぬほど大きな成功を収めた時期である。ルーセルは、彼の捕囚となったカイサルのヨハネス・ドゥーカス（皇帝ミカエル7世［在位1071－1078]の叔父）を対立皇帝に擁立して、一時は小アジア全土、あるいはビザンツの皇帝の座すら窺う形勢を示すことになる。しかし、そうした壮大な計画は、皇帝側に与したトルコ人の軍勢との戦闘でルーセルとカイサルがいずれも捕囚にされてしまったことで頓挫してしまう。彼の反乱の第二段階は、その後、かろうじて自由を回復したルーセルが本来の彼の拠点であったアルメニアコンに舞い戻り、そこで規模を縮小した反乱活動を再開し、現地で自立を図った時期である。

前述した我々の問題関心から言えば、こうした2つの時期のうちで後半の部分の考察により大きな比重がかけられることになるだろう。

ただし、一見したところでは予想外の成功に悪乗りした向こう見ずな冒険のように見える第一段階のルーセルの行動にしても、詳細に検討してみれば、多くの興味深い論点が含まれていることに気付くはずである。この後で詳しく論じられるように、そこにおいて彼は、その後、第二段階でアルメニアコンにおいて実現しようとした自立した支配領域の確立を、より大きな規模で、しかもビザンツの支配階層の協力を得て、現実のものにしようとしていたように思われるからである。

また、彼が、捕囚のカイサル、ヨハネスを自分の傀儡として対立皇帝に擁立した、という行為に着目すれば、そこに、自らは皇帝としての名乗りを上げることのできない外国人がビザンツの政局に介入するために編み出した巧妙な術策を見い出すことができるだろう。その意味で、彼の行動は、偽ミカエル7世を押し立ててビザンツ侵攻を企てた南イタリアのノルマン人の首領ロベール・ギスカールから、皇子アレクシオス（皇帝イサキオス2世[在位1185－1195]の息子）の権利回復への援助を口実にコンスタンティノープルを攻撃した第4回十字軍に至るまでの西欧勢力のビザンツへの軍事介入の先駆的な現象として解釈することも可能かもしれない。

さらに、当初はビザンツの帝位を望み、その夢が破れた後には、帝国領の一部を切り取り、そこに独自の領国を建設しようとした彼の行動は、帝国の東南部国境地帯で自らの支配権確立に没頭して帝位への野心を見せなかったフィラレトス・ブラカミオスと、自己の本拠を捨て、首都への進軍と帝位奪取しか頭になかったように見えるニケフォロス・ボタネイアテス、という同時代の2人の人物の反乱行動の、ちょうど中間的な形態を占めているようにも思われるのである。

地政学的な観点から見れば、帝都から遠く隔たり、アラブ・イスラム世界と境界を接する小アジア南東部に拠ったフィラレトスは、自ずとコンスタンティノープルの皇帝権への執着が薄く、他方、小アジア中央台地の西よりのフリュギア地方に本拠を置いたボタネイアテスは、名門貴族の一員として中央とも深いコネクションを有したために、中央志向がいっそう強固だったと言えるのかも知れない。これに対して古来、小アジアの中核的属州の一角を占めたアルメニアコンに拠点を置き、一時はさらに西方のガラティア、リュカオニア（テマ・ブケラリオンとアナトリコンの一部）にまで勢力を広げようとしたルーセルの反乱は、両者の中間的な性格を帯び、状況に応じていずれの側にも転じうるような可能性を秘めていたと考えることも可能であろう。

ともあれ、こうした議論がどの程度の蓋然性を有するかについては、彼の反乱の経過をより詳細に検証する作業の中で問い直す必要があるだろう。以下ではルーセルの行動の経緯を再構成しつつ、彼が実現を目指した国家の構造を解明するという課題に取り組むことにしよう。

(2) 第一段階 ——アナトリア全土の支配を目指して——

1073 年春[13]、小アジアで作戦行動中の東部方面軍総司令官（ドメスティコス・トーン・スコローン・テース・アナトレース）イサキオ

---

[13] ルーセルの反乱が開始された時期に関して史料中に明確な記事は見い出されず、研究者の間でも意見は完全には一致していない。この点に関しては、ミカエル7世政権と先帝ロマノス4世との内戦が1072年6月に終結したことを踏まえ、イサキオス・コムネノスによる小アジアにおける軍事作戦の開始を同年秋、ないし翌 1073 年春のことと推測した J.シェネの議論（J.-C.Cheynet, *Pouvoir et contestation à Byzance (963-1210),* Paris,1990,p.79,n.1）が参考になるだろう。本稿では、内戦の戦後処理を行い、新たな軍事作戦を準備するには 1072 年いっぱいを要した（内戦で戦功を立てたアンドロニコス・ドゥーカスが褒賞としてミレトス近郊の所領を皇帝から受け取るのは1073年2月のことである。cf.F.Döger und P.Wirth, *Regesten der Kaiserurkunden des oströmischen Reiches,* vol.2, 2Aufl.,München,1995,Nr.992a,994,994a）と考えて、1073 年春説を採ることにしたい。他方、D.I.ポレミス（ D.I.Polemis, "Notes on Eleventh- Century

ス・コムネノス配下の軍勢から、些細な事件をきっかけにルーセルは離脱した[14]。彼は配下のフランク人傭兵400を率いてイコニオンから進路を東に採り、メリテネ近郊で遭遇したトルコ人部隊を撃破して、小アジア北東部一帯の支配権樹立に着手する。

この間、彼らの追撃を図ったイサキオスの部隊は、途中、カイサレイアの近くで別のトルコ人部隊と交戦して敗北を喫し、司令官のイサキオス・コムネノスが捕囚にされてしまったために作戦行動は中止せざるを得なかった。[15]

すぐにビザンツ側の追っ手が現れる可能性が消えたことで、ルーセルは大きな行動の自由を得た。「ルーセルは易々とガラティアからリュカオニアに至る町や諸都市を巡り、それらを寇掠したり、説得して自分の味方に付けたりしながら、それらから金銭を徴発した」とブリュエンニオスは報じている。[16] 「ガラティア」はアナトリア中央高原の北側（中心都市はアンキュラ）、「リュカオニア」は同高原の南側（同イコニオン）にかけての地域であるから、ルーセルはアナトリア高原一帯に自己の支配を打ち立てようとしていたことになる。

こうした状況に危機感を募らせたコンスタンティノープルのミカエル7世政府は、皇帝の叔父、カイサルのヨハネス・ドゥーカスを総大将とする追討軍を派遣することを決定した。[17] 1074年春、出陣の準備を整えたカイサルは、副官役を務める彼の長男でプロートプロエドロスかつ東部方面軍総司令官のアンドロニコス・ドゥーカスと共に小アジアに渡った。このとき、彼の部隊の主力を占めてい

Chronology" ,*Byzantinische Zeitschrift,* 58,1965, pp.60-76 ,esp .pp. 66-68）は、史家ニケフォロス・ブリュエンニオスの記述が時系列的に配置されている、という前提に立ち、イサキオスの軍事作戦は、1073年秋のカイサル、ヨハネス・ドゥーカスのビテュニアへの退去以降に開始されたのであり、それゆえルーセルの反乱は1073年から1074年初頭の冬にかけて発生したのだと考えている。

[14] 軍律に違反したルーセル配下のフランク人傭兵をイサキオスが勝手に処罰したことに憤慨したのがルーセルの戦線離脱の直接の原因だった。しかし、ブリュエンニオスが伝えるところによれば、ルーセルはそれ以前から反乱を実行する機会を窺っていたのであり、今回の小事件は計画を実行に移すための口実に過ぎなかったという。 cf.Nikephoros Bryennios,p.148f.

[15] Michael Attaleiates,p.183f; Nikephoros Bryennios,pp.146-151. イサキオスはその後まもなく周辺の都市から集められた身代金のおかげで解放された。 cf. Nikephoros Bryennios,p.156f.

[16] Nikephoros Bryennios,p.167.

[17] *ibid.*,pp.166-169. ブリュエンニオスが報じるところによれば、カイサルの追討軍総司令官への指名という人事には、この時期に政権内で急速に力を就けつつあった外務・駅逓長官（ロゴテテース・トゥ・ドロムウ）ニケフォリツェスの意向が反映されていたという。後者は権力を行使する上で目障りなカイサルを厄介払いすることを望んで、皇帝に働きかけ、カイサルに追討軍の総司令官という困難な任務を押し付けたのである。

たのは、首都に駐屯するヴァリャーグ人近衛部隊[18]と、パパスという名の隊長に率いられた「ケルト人」傭兵隊であったと思われる。[19]

カイサルの軍はビテュニア地方を進軍し、ドリュライオンの町に一時、滞在した。[20] おそらくここで小アジア西部の軍勢が集まられると共に、アナトリコン長官でクロパラテスのニケフォロス・ボタネイアテスの率いる軍勢[21]との合流が図られたのであろう。

追討部隊の出現の知らせを受けたルーセルは急ぎ配下の軍勢を集め、本拠のアルメニアコンを出立、昼夜兼行で西に向かった。両軍は、アナトリコンとカッパドキアの境界を画するサンガリオス川に架かったゾンポス橋を挟んで対峙する。

カイサルは、戦闘陣形を整えて橋を渡ってくる敵を迎撃すべきだというボタネイアテスの献策を退けて先制攻撃を仕掛けることを決断した。だが皇帝軍の右翼を指揮するパパス配下の「ケルト人」部隊がルーセル方に寝返ったのを機に皇帝軍は総崩れとなり、カイサル自身、重傷を負った彼の息子のアンドロニコスと共に敵の捕虜となって、戦いは皇帝軍の惨敗に終わった。後衛部隊を指揮して戦局を見守っていたボタネイアテスは、皇帝軍の敗北を見届けると、自軍を率いてすぐに戦場から離脱した。[22]

この勝利に勢いづいたルーセル軍は、鎖で縛ったカイサルを引き立てて帝都への進軍を開始する。彼の許には各地からフランク人傭兵が集まり、その兵力は３

---

[18] 北欧・ロシア系の戦士で構成された近衛軍団。10 世紀初頭以来、皇帝の身辺警護と宮殿の警備に重要な役割を果たした。11 世紀後半以降はアングロ・サクソン人がこれに加わった。同軍団に関しては、S.Blöndel & B.S.Benedikz, *The Varangians of Byzantium,* Cambridge,1978; H.R.E. Davidson, *The Viking Road to Byzantium,* London,1976; 拙著『ビザンツ 幻影の世界帝国』講談社、1999 年、170－174 頁を参照のこと。

[19] Nikephoros Bryennios,p.168f. ここでブリュエンニオスは他の箇所で一般的に用いている「フランク人」ではなく、「ケルト人」という呼称を用いている。そこから、パパス麾下の部隊は、ルーセルのそれと民族系統が異なるかのような印象が受ける。しかし、ブリュエンニオスは別の箇所では、ルーセルの部隊を「反逆したケルト人たち」と呼んでいる（Nikephoros Bryennios,p.173）ので、そこに厳密な区別を見るのは実際には困難であろう。

[20] Michael Attaleiates,p.184; Nikephoros Bryennios,pp.166-169.

[21] ブリュエンニオスの好古趣味的な表現に従えば、ボタネイアテスは、「フリュギア人、リュカオニア人、アシア人の軍団」を率いていた。 Nikephoros Bryennios,p.169. ブリュエンニオスの編者 P.ゴーティエは、この「フリュギア人とリュカオニア人」の軍団をコマテノイ（後に反乱を起こしたボタネイアテスが首都に進軍した際、彼に同行した部隊）、「アシア人」をテマ・トラケシオンの部隊と同定している。Nikephoros Bryennios,p.169,n.8. しかし、「フリュギア人とリュカオニア人」に関しては、ゴーティエのように狭く限定せず、ボタネイアテスの指揮下にあったアナトリコンの軍勢と見なす方が妥当ではないだろうか。

[22] Michael Attaleiates,p.184-186; Nikephoros Bryennios,pp.168-173.

千にまで膨れ上がったという。[23]

敗戦の報を受けた皇帝政府は急ぎ新たな征討軍の派遣を決めたが、予定された司令官のコンスタンティノス・ドゥーカス（カイサルの次子）が急死したために計画は立ち消えになった。[24] 動揺する政府は懐柔策に転じ、ルーセルに対して、もしも武器を置くなら、クロパラテスの爵位と多くの贈与を与えると申し出、後には首都で暮らしていた彼の妻子を送ったが、目立った効果は得られなかった。[25]

ルーセルの軍勢は首都対岸のクリュソポリスを占領、そこから撤収する際には町を焼き払った。コンスタンティノープルの人々は、夜の闇の中に炎が立ち上るのを望見し、風に乗って運ばれる悲鳴や叫び声を耳にしたという。[26]

いったんニコメディアまで退いたルーセルは、ここで新たな行動に出る。今まで捕虜として引き回してきたカイサルを解放し、「ローマ人の皇帝」として擁立したのである。アッタレイアテスによれば、「彼（＝ルーセル）は、カイサルの縛めを解き、恭しく挨拶してこれまでの非礼を詫びると、彼をローマ人の皇帝として擁立し、皇帝に相応しい賛歌や顕示によって、彼に帰属する権力を華々しく演出したのであった。」[27]

当時、甥のミカエル７世とロゴテテース、ニケフォリツェスの自分に対する処遇に不満を募らせていたカイサルにとって、こうした成り行きは必ずしも意に沿わぬものではなかったらしく、彼は半ば積極的に対立皇帝としての役回りを演じ、密かに都の人々と接触して味方を増やすのに努めたという。[28]

しかし、この間のルーセルの行動には、いささか不可解な面があるように感じられるのは筆者だけであろうか。彼の目的がカイサルを対立皇帝に擁立することで帝都内に同調者を見い出し、都でクーデタを発生させて帝位を我が物にすることであったならば、首都の対岸クリュソポリスを占拠した際に、対立皇帝としてのカイサルの姿を見せ付けた方がはるかに効果的だったはずである。ルーセルが首都に接近したとき、ミカエル７世はこれに呼応した陰謀が都の中で企てられているのではないかと不安に駆られた、というアッタレイアテスの記述[29] を見れば、さらにそうした印象が強められるであろう。ところがニコメディアに退いてからカイサルを皇帝として歓呼したのでは、首都の人々へのインパクトは大幅に低下

---

[23] Michael Attaleiates,p.188.
[24] Nikephoros Bryennios,p.176f.
[25] Michael Attaleiates,p.187-189.
[26] *ibid.*,p.188f.
[27] *ibid.*,p.188.
[28] Nikephoros Bryennios, pp.176-179; cf. D.I.Polemis, *The Doukai: A Contribution to Byzantine Prosopography,* London, 1968, p.38.
[29] Michael Attaleiates,p.186f.

するのは避けられまい。[30]

一見して不可解に見えるルーセルの行動を解き明かす鍵は、2 人のビザンツ史家の記述の中にある。ブリュエンニオスは、カイサルの皇帝擁立によって首都の「有力者たち」の好意を得ようとしたことを指摘すると共に、皇帝の姿のカイサルを前面に押し立ててルーセルが諸都市を経巡り、それらを自己の支配下に組み込んでいったことを伝えている。[31] 一方、アッタレイアテスは首都のことには一言も触れず、カイサルを対立皇帝として歓呼させたのは、ルーセルが「ローマ人の兵士たちを配下に収め、自らの軍勢を大軍にしようとした」ためであると語っているのである。[32]

このように見てゆけば、コンスタンティノープルのミカエル 7 世政権を打倒してビザンツの帝位を奪うことは確かにカイサルにとっては魅力的な目標であったとしても、ルーセルにとっては最優先の課題ではなかったのではないか、という思考にたどりつく。すなわち、後者がカイサルを対立皇帝の座に据えたのは、首都を制圧してビザンツの帝位を思いのままにすること以上に、カイサルという旗印を示すことで、外国人である彼には容易に服従の意を示さない小アジアの諸都市や現地駐屯のビザンツ軍将兵の帰順を促し、小アジアの地に確固とした支配権力を打ち立てるためだった、と考えられるのである。

後にカイサルがトルコ人の捕虜になったとき、今度はトルコ人たちがカイサルを皇帝に担ぎ、「その結果、ローマ系の諸都市や町々、そして有力者たちから戦わずして多大な支援が与えられる」ことが懸念された、とアッタレイアテスは伝えている[33] が、おそらくルーセルがカイサルに求めたのも同様な役回り、すなわち小アジアのビザンツ系諸都市、軍隊、現地有力者の支持を取り付けるための統合のシンボルとしてのそれ、であった公算が非常に高いと言えるだろう。

ルーセルが既存のビザンツの統治機構を最大限、継承し、そこで働く官吏たちの掌握に努めたであろうことは、彼が、カイサルと共に捕虜になっていた旧知の文官バシレイオス・マレセスの実務能力を高く評価し、この人物を自分の片腕と

---

[30] ホフマンは、ルーセルが「捕虜となっていたヨハネス・ドゥーカスを皇帝として戴冠させ、コンスタンティノープル目指して進軍し、クリュソポリスに陣を敷いた」と語っている。確かにこちらの方が行動として自然なように思われる。しかし、そうした記述は、アッタレイアテスやブリュエンニオスが伝える事件の順序とは明らかに異なっていることを指摘しておかねばならない。 J. Hoffmann, *Rudimente von Territorialstaaten*, S.109.

[31] Nikephoros Bryennios,p.176f.

[32] Michael Attaleiates,p.188.

[33] *ibid.*,p.192.

して重用していたという事実からも推察される。[34]

さらに、この時期、ルーセルが活動の拠点を置いているのがビテュニア地方、メタボレーの要塞に近いカイサルの所領館であったことも注目に値する。筆者は別稿で、カイサルのこの所領は、10 世紀に皇帝直属の御料牧場として馬匹や駄獣の育成、供給に責任を負ったマラギナ厩舎と深い繋がりを有したことを論じたことがある[35] が、そうした見解に従えば、ルーセルは小アジアにおける馬匹の一大供給センターに自らの拠点を据えたことになるのである。[36]

このように見れば、ルーセルの遠大な計画の全貌が次第に明らかになってくる。彼は、カイサル、ヨハネスという名目的な首長の下で、小アジアに強大な独立国家を樹立することを夢想していたのではないだろうか。ビザンツの行政機構は温存され、ルーセルの片腕となったバシレイオス・マレセス以下のビザンツ人官僚たちの手で民政業務が担われて、諸都市や農村地帯からの徴税が実施される。この国家の国土防衛には、ルーセルの下に参集したフランク騎兵に加えて、小アジアに駐屯するビザンツ軍将兵の協力が期待された。さらに、アナトリア中央高原の牧畜地帯を押えることで軍用馬や役畜の安定した供給が確保されることになるだろう。いわば、ここでルーセルが夢見たのは、後に彼がアルメニアコンで実行することになるプランを、より大規模に、かつ現地のギリシア系勢力の広範な協力を確保しながら、実現することだったと考えられる。

だが、こうした壮大な夢は一瞬にして潰え去った。

皇帝政府の指嗾を受けたトルコ人の首領アルトゥークの軍にルーセルの軍勢は大敗を喫し、ルーセルとカイサルは共に敵軍の捕囚にされてしまったのである。[37]

---

[34] *ibid.*,p.187. マレセスは史家アッタレイアテスの親友であり、ロマノス 4 世（在位 1068－1071）治下に水道局長官に就任、同帝のマンツィケルト遠征に同行し、捕虜となった。解放された後、カイサルの軍征に同行し、今度はルーセルの捕虜になったのである。もともとロマノス 4 世の支持者と見なされた彼は、ミカエル 7 世政権によって財産を没収されており、そうした現政権の仕打ちに対する敵意が彼をルーセルの積極的な支持者にさせたらしい。cf.N.D.Duyé,"Un haut fonctionnaire byzantin du XIe siècle: Basile Malésès", *Revue des Études byzantines,* 30,1972,pp.167-178.

[35] 拙稿「コムネノス家――11 世紀ビザンツ軍事貴族家門の相貌――」、『金沢大学文学部論集 史学・考古学・地理学篇』20 号、2000 年、1－41 頁、特に 19－20 頁。

[36] シェパードも、ルーセルが当初、ガラティアとリュカオニアの制圧を図ったのは「これらの地域は人口稠密で水利に恵まれており、重装騎兵に好都合な広い平野を幾つも抱えていた」からであると語り、豊かな農村地帯であると共に軍馬の供給地としても重要な、これらの地域の掌握をルーセルが重視していたことを強調している。 cf. J.Shepard, "The Use of the Franks ",p.300.

[37] Michael Attaleiates,pp.189-192; Nikephoros Bryennios,pp.178-171. この

メタボレー要塞を守るルーセルの妻は急ぎ身代金を整えて彼を解放した。その後、彼は妻子や彼につき従うフランク人の将兵と共にメタボレーを去り、小アジアを突っ切って、本拠のアルメニアコンを目指す。[38] 彼の反乱は、ここに第二の段階に入るのである。

(3) 第二段階 ——幻のポントス・フランク国家——

「 (ルーセルは)テマ・アルメニアコンの彼の以前の諸城塞を占拠すると、そこで再度、態勢を立て直した。かくして彼はトルコ人に対して攻撃を行い、このテマに彼らが攻め寄せ、戦乱の惨禍を撒き散らすことを防いだのである。」[39]

ルーセルがアルメニアコンで再起した、という知らせを受けたミカエル7世政府は、1075年春に皇妃の実家であるグルジアにニケフォロス・パラエオロゴスを派遣して傭兵6千を集めさせ、ルーセルの追討に当たらせようとした。

しかし、この作戦は、皇帝政府が約束した俸給を支払うことができず、傭兵の大半が帰国してしまったために失敗に終わった。パラエオロゴスの下に残った僅かな兵も、ルーセルの軍勢に簡単に粉砕されてしまったのである。[40]

次に皇帝は、プロエドロスのアレクシオス・コムネノスをストラトペダルケスかつストラテーゴス・アウトクラトール[41]に任命し、ルーセルの追討を命じた。[42]

当時、アレクシオスはまだ18歳の青年であり、一軍の将として軍隊を率いるのはこれが初めての体験だった。しかも、財政的に窮迫していた皇帝は、彼に充

会戦が行われた年代は明らかではないが、おそらく1074年の秋から冬にかけての時期であったと思われる。

[38] Michael Attaleiates,p.198f; Nikephoros Bryennios,pp.180-183. 他方、カイサルは後から到着した皇帝の使者によって請け戻された。首都を前にしてカイサルは、反逆者として断罪されるのを恐れて修道衣をまとった。 Michael Attaleiates,p.193; Nikephoros Bryennios,p.180f.

[39] Michael Attaleiates,p.199.

[40] Nikephoros Bryennios, p.182f; J.-F.Vannier, "Les premiers Paléologues. Étude généalogique et prosopographique" ,dans J.-C. Cheynet et J.-F.Vannier, *Études prosopographiques,* Paris, 1986,pp. 123-187,p.133f.

[41] ストラトペダルケスは、ドメスティコス・トーン・スコローンに準じ、前線の全軍の指揮を担う高位の軍司令官職、ストラテーゴス・アウトクラトールは特定の軍事作戦に限り非常大権を与えられた総司令官職の名称である。cf.R.Guilland, *Recherches sur les institutions byzantines,*2vols., Amsterdam,1967,vol.1, pp. 380-385,pp.498-521.

[42] Nikephoros Bryennios, p.182f.

分な軍勢も、軍を徴募するのに必要な資金も提供してくれなかったのである。[43]

出陣したアレクシオスは、アマセイアの町でアラン人の敗残兵 150 を配下に加えた後、作戦行動を開始した。[44]

兵力でルーセルの軍勢に劣る彼は、正面からフランク人部隊と対決するのを極力回避し、繰り返しゲリラ戦を挑んで敵の消耗を誘った。

結局、ルーセルは、アレクシオスと密かに通じたトルコ人の首領トゥタクの奸計にはまって捕囚となり、一連の冒険に終止符が打たれることになる。アレクシオスはアマセイアの市民を説得してルーセルの身代金支払いを肩代わりさせることで後者の身柄を確保し、その任務を成功裏に終えることができたのである。

この間のルーセル配下の軍とアレクシオスの手勢との交戦の記述や、ルーセルがトルコ人の捕囚になった後、彼の身代金支払いをめぐってアマセイアで開催された市民集会でのアレクシオスと市民とのやりとりの模様から、我々はルーセルがアルメニアコンで築き上げた支配体制の構造をかなり具体的に再構成することができる。以下にそれを順をおって整理してみることにしよう。

まず第一に確認できることは、ルーセルは、この地域一帯に所在する複数の城塞（Φρούρια）を占拠することで、周辺の地域を支配する拠点としていたことである。史書の記述を見る限りでは、これらの城塞を占領するのにルーセルが苦労した形跡はなく、むしろ、彼は何の抵抗も受けることなくそれらを接収しているように見える。

この点に関して注目されるのは、アッタレイアテスが、それらを「彼（＝ルーセ

---

[43] このときアレクシオスが動員できた兵力については、後述するごとく、アマセイアでアラン人の敗残兵 150 を配下に加えたこと以外、はっきりしたことは分からない。ブリュエンニオスの編者ゴーティエは、後年、皇帝になったアレクシオスが、このときの軍務を回想して、「自分がタクシアルケスだったとき…」と語った『聖キュリロス伝』の記事を引き、タクシアルケスは歩兵千人隊長を意味するから、当時、アレクシオスの配下にはおよそ 1 千の兵がいたのだろうと推測している。cf.Nikephoros Bryennios, p.183,n.7,p.184,p.4；E.Sargologos éd.,*La vie de Saint Cyrille le Philéote, moine byzantin,* Bruxelles,1964,p.233,459f.　タクシアルケスについては、N.Oikonomidès,*Les listes de préséance byzantines des IXe et Xe siècles,* Paris,1972,p.335f.

しかし、聖者伝という史料の性格を考えれば、ここで用いられているタクシアルケスという語は、その厳密な意味ではなく、単なる軍司令官という意味で解釈すべきではないだろうか。J. ハルドーンは、ミカエル 7 世がルーセルに差し向けることのできた兵力は 2～300 程度（'a few hundreds troops'）に過ぎなかった、と語っている。彼はその論拠を示していないが、筆者がブリュエンニオスの記述から受ける印象もこれに近い。　cf.J.Haldon,*The Byzantine Wars. Battles and Campaigns of the Byzantine Era,* Stroud,2000,p.111.

[44] Nikephoros Bryennios, p.184f.

ル）の以前の諸城塞」(傍点筆者)と呼んでいることである。[45]

前にも述べたように、フランク人傭兵は以前からテマ・アルメニアコンを冬営地としており、その首領は、この地に所領を保持するなど、すでにこの地域と深い関わりを有していた。[46] ルーセルの前任のフランク人傭兵隊長ロベール・クリスピンも、アルメニアコン内の「攻略困難な高い崖の上」に立つマウロカストロン(「黒い城」)という名の城塞を保有していたことが知られている。[47]

シェパードが推測しているように、おそらくこうした城塞は、本来、地域防衛の拠点として、ビザンツ当局から彼らフランク人傭兵隊に管理が委ねられていたのであろう。[48] ルーセルは、ミカエル 7 世の治世初年にクリスピンが死去した後、後者が保持していたアルメニアコンの諸城塞の管理権を引き継いだのだと思われる。そしてその後、アルメニアコンで中央政府からの自立を決意した際、彼は配下のフランク人傭兵を守備隊としてこれらの城塞に配置して領域支配の基盤を固めようとしたのではないだろうか。

これに対して、アレクシオス・コムネノスは、こうした城塞のネットワークをひとつずつ破壊してゆく、という作戦を採った。彼は、配下の手勢にわざと城塞の近くで掠奪活動を行わせ、それを見た城の守備隊が掠奪者を追おうと打って出ると、隠していた軍勢で退路を断ち、出撃した敵兵を制圧する、という戦法を採用したのである。[49] また後には、城塞に至る道筋を封鎖し、小麦などの必要物資が搬入されるのを妨害したり、伏兵をひそませて出撃した敵兵を補足させたりもしている。[50]

こうしたアレクシオスの作戦行動を報じるブリュエンニオスの記述から、逆に、フランク人たちの地域防衛のための活動の様子を浮かび上がらせることができるだろう。

彼らは地域内の各地に散在した城塞に拠り、周囲を監視していたのであり、もしも近くに掠奪者が出現した場合には、城から出撃してこれらの撃退を図った

---

45 Michael Attaleiates,p.199. “τοῖς προτέρς αὐτου κάστροις”

46 11 世紀における最初の著名なフランク人傭兵隊長エルヴェ・フランゴプロスは、テマ・アルメニアコンのダガラベ（Δαγαράβη）の地に館を有していた。Ioannes Scylitzes,*Synopsis historiarum,* ed.,H.Thurn,Berlin, 1973,p.485.

47 Michael Attaleiates,p.125.

48 J.Shepard,“The Use of the Franks”, p.297,n.100; P. Magdalino,“The Byzantine Army and the Land”,p.29. 城塞の私的所有が皇帝政府によって公式に承認されるのは、ミカエル 7 世の治下であるから、それ以前の時期におけるフランク人傭兵隊長の城塞保有は、当局の委託と承認の下でなされていた、と考えるのが妥当だろう。

49 Nikephoros Bryennios, p.184f.

50 *ibid.*,pp.192-195.

のである。それはまさしく地域の治安と平和を守るための活動であり、トルコ人の掠奪集団が現れた場合にも同様の対応がとられたに違いない。アッタレイアテスが語るように「彼（＝ルーセル）はトルコ人に対して攻撃を行い、このテマに彼らが攻め寄せ、戦乱の惨禍を撒き散らすことを防いだ」のである。[51]

中央政府に叛旗を翻した反乱軍の首領が地域社会の平和と安定を保障する役割を積極的に担い、一方、中央から派遣された皇帝軍の将軍がそうした地域防衛の枠組みを破壊してまわっているのは皮肉としか言いようがない。

シェパードが推定しているように、城塞の守備隊が長期の籠城に耐えるのに充分な補給物資を備蓄していなかったのは、現地の生産者から生活物資を常時、入手できる見通しがあったからだったと考えるならば、ここにもフランク人傭兵と現地住民との間の信頼と相互依存関係の傍証を得ることができるだろう[52]。

ルーセルの地域支配の基盤を構成する第二の要件は、配下のフランク人部隊を給養し、その活動を維持するための資金を、支配下の地域から税として徴収することであった。

このことに関して、アマセイアの市民集会の席上でアレクシオスが市民たちに次のように語りかけているのが思い出されるであろう。

「　あなた方はこの蛮族(＝ルーセル)がどんな手口でアルメニアコンの全ての都市を扱ったか、どれほどの金をあなた方から徴収したか、どれほど多くの町を荒らし、人々に虐待を加えたのか、そして資金に事欠いて耐えられぬほどの科料を課したかについて御存知のはずだ。」[53]

ブリュエンニオスは別の箇所でも、ルーセルが「アマセイアやネオカイサレイアといった都市を苦しめ、農村部を荒らして租税を支払うよう強制した」と語り、彼の支配が暴力に裏付けられた強圧的なものだったことを強調しようとしている[54]。

しかし、ルーセルが課した税はそれほど重く、彼の支配は本当に苛酷なものだったのだろうか。実際のところ、もしもルーセルが税収の永続的な確保を望んでいたとしたら、農村部を徹底的に荒廃させる意図などなかったことは自明のことではなかろうか。また、ルーセルの前任のフランク人傭兵隊長クリスピンが以前に反乱を起こしたとき、彼は行き当たった徴税人その他の身ぐるみを剥ぎ、財貨を奪ったが、ビザンツ人を殺すことは一人もなかった、というアッタレイアテス

---

[51] Michael Attaleiates,p.199..
[52] J.Shepard,"The Use of the Franks", p.300f.
[53] Nikephoros Bryennios, p.188f.
[54] *ibid.*,p182f.

の記述[55] も想起すべきであろう。ルーセルはクリスピンの同僚だったから、彼はこうした振舞い方を身近に見聞し、それを充分に学習していたに違いない。それゆえ、ここで話題に上っているのは、税の支払いを住民に促すための示威的行動の域を出るものではない、と考えた方が実態に近いのではないだろうか。[56]

現地住民が必ずしも自分たちがルーセルの支配の被害者だとは感じていなかったことは、ルーセルがアレクシオスの捕囚になったとき、アマセイアの有力市民たちが民衆を煽動し、彼には何の被害も受けていない、と叫びながら、彼の解放を図った、という逸話からも裏付けられるのである。[57]

現代の研究者もルーセルが課した税は中央政府がそれ以前に徴収していた税額よりも低かった、と推定している点で一致した見解を示している。[58] またこれと関連して、ホフマンは、現地住民がルーセルに共感を寄せた要因として、ビザンツ国庫と比べて彼が要求した金額が軽かったことと並んで、トルコ人の脅威を排除してくれたことを挙げている。[59] この指摘は重要であろう。現地の住民たちは、自分たちが支払った金が、フランク人傭兵部隊による地域の防衛という「目に見える」かたちで公共の福利に役立てられるのを目にすることができた。これに対して中央政府は、これまで多額の税負担を要求しながら、集めた税を持ち去るばかりで、住民たちが切望する外敵からの保護という重大な任務をいっこうに果たそうとしなかったのである。フランク人傭兵部隊が、従来よりも相対的に安い対価で地域社会の安全保障業務を見事に果たしているのを見たとき、人心がどちらに傾くか想像するのは容易なことである。

---

55 Michael Attaleiates,p.123.

56 J.-C.シェネも、フランク人ら外人傭兵部隊は久しい以前からアルメニアコンを冬営地にしており、それによって現地住民に親しまれ、後者から高い評価を受けていたのであり、外人傭兵は自分たちが防衛してやるべき住民たちを終始、掠奪し、虐待していた、と想像するのは慎まなければならない、とコメントしている。J.-C.Cheynet,*Pouvoir et contestation,* p.406.

57 Nikephoros Bryennios, p.190f.

58 ただし、その徴収に現地のビザンツ官吏が関与したか否かについては研究者の間で若干の見解の相違がある。ホフマンは、ルーセルがどの程度、既存の官僚組織を受け継いだかは不明であり、彼が行った徴税は「貢納」の範囲を超えるものではなかった、と推定し、一方、シェパードは、現地のビザンツ官吏が徴税業務を担当した可能性があることを指摘する。明確な証拠に欠けるこうした論争に、はっきりとした決着を付けるのは困難だが、ルーセルがバシレイオス・マレセスのようなビザンツ文官の能力を積極的に活用しようとする姿勢を示していることを思えば、シェパードの議論の方が蓋然性が高いと言えるだろう。 cf. J. Hoffmann, *Rudimente von Territorialstaaten* ,S.129; J.Shepard,"The Use of the Franks",p.301.

59 J. Hoffmann, *Rudimente von Territorialstaaten* ,S.119.

ルーセルとその配下のフランク人傭兵たちは、確かにときとして粗暴な面を示し、暴力で人々を威圧する側面があったかもしれない。しかし、トルコ人の日常的な襲撃に晒されていた地域住民にとっては、そうした小さなトラブルを甘受してでも彼らの提供する軍事的な保護を享受する必要があったのである。

このように見てくれば、一見、不可解なように見えるアマセイアの有力市民たちのアンビヴァレントな行動も、理解が可能になってくる。

前に見たように、アマセイアの町は、ルーセルの軍に粉砕されたアラン人部隊の敗残兵を市内に収容し、その後、中央から軍司令官のアレクシオス・コムネノスが派遣されてくるとその作戦拠点となるなど、一貫して中央政府に忠実な態度を保っていた。ところが、その一方で、これも先に目にしたように、同市の有力市民は、あからさまにルーセルへの共感を示し、捕らえられた彼の救出を図っているのである。

こうした有力市民の態度にアレクシオスは苛立ちを募らせており、一般市民に宛てた演説の中で、彼は有力市民たちの欺瞞的な態度に激しい批判を浴びせたのである。

「　アマセイアの市民よ、私は驚いているのだ。何と易々とあなた方は詐欺師たちに欺かれていることか。彼らはあなた方の血で自分たちの利益を贖い、あなた方に多大な害をもたらしている。あなた方はこうしてひどい害を受ける一方で、あなた方を怒りと騒乱へと煽り立てようとしている人々は安全な屋敷の中に留まって、この蛮族（＝ルーセル）に従う一方で、この都市を蛮族に明け渡さないための皇帝からの贈与を受け取っているのである。」[60]

このアレクシオスの発言から、アマセイアの有力市民は表向き中央政府への忠誠を装って国庫から財政援助を受けていたことが分かる。同じ時期にバルカン属州のドナウ沿岸諸都市が皇帝政府から資金の提供を受けていたことが知られている[61] ので、ここで話題に上っている援助も同様の性格を帯びたもの、すなわち、国境地帯に充分な軍隊を配備できない政府が、現地住民の自助努力を助け、都市

---

[60] Nikephoros Bryennios, p.190f.　アレクシオスはさらに彼ら有力市民がルーセルへの加担を望むのは、後者の歓心を得る一方で「自分たちは安全な屋敷に留まりながら皇帝から栄誉や贈物を要求するためである」と同趣旨の発言を繰り返し、こうした有力者の自己本位な態度を非難している。

[61] Michael Attaleiates,p.205.　この時期のドナウ諸都市の状況については以下の文献を参照のこと。　N.Banescu, *Les duchés byzantins de Paristorion (Paradounavon) et de Bulgarie,* Bucarest, 1946 ,pp.90-93；P.Stephenson, *Byzantium's Balkan Frontier：A Political Study of the Northern Balkans, 900-1204,* Cambridge,2000,pp.98-100.

城壁の整備や修復などに要する経費を一部負担するために行っていたものであると解釈できるだろう。

こうした状況にあったから、アマセイアの市民たちは、帝都から軍司令官としてアレクシオスが到着すると、この若い将軍を恭しく迎え入れ、中央政府に対して従順な態度を示したのではある。

ところがその一方で、彼らは地域の安全保障を実質的に担っていたフランク人傭兵隊との関係を絶つこともできなかった。彼らはルーセルの一味と通じ、後者に税を支払うことで自分たちをトルコ人の襲撃から守ってくれるフランク人傭兵部隊を経済的に支えていたのである。

もっとも、彼らとフランク人傭兵隊との関係を、どんなときでも生死を共にする運命共同体的なものと想像するのは行き過ぎであろう。アレクシオスが次々とフランク人の占拠する要塞を攻略してゆくにつれ、「以前は彼（＝ルーセル）に対する恐怖のために服属したり、好意をもって彼に租税を支払ったりしていた諸都市の中で、それ以後は彼の許から離れるものが出はじめ、彼に何も払わなくなった」というブリュエンニオスの記述[62] がそのあたりの微妙な空気を伝えている。

要するに、諸都市がルーセルの一味のフランク人傭兵部隊を支持していたのは、彼らが地域の平和と安定を守れるだけの能力を発揮していた限りのことであって、もしもそうした力に欠けると判断された場合には、当然、両者の関係は見直され、場合によっては清算された公算が高いのである。現地の住民にとっては、彼らの身体と財産をしっかりと守ってくれるのであれば、税を支払う対象は、反乱を起こしたフランク人傭兵部隊であれ、中央政府であれ、どちらでもよかったと言えるだろう。

とはいえ、視界のはるか彼方のコンスタンティノープルの皇帝政府よりも、近隣の城塞に詰めて周囲に目を光らせていたフランク人傭兵部隊の方が、現地住民の目にはずっと頼りがいのある存在に映ったことは想像に難くない。

周辺地域に所領をもつビザンツの有力貴族も思いは同じだった。テマ・アルメニアコンとパフラゴニアの境界地帯に本拠を持つマギストロスのテオドロス・ドケイアノスは、従兄弟のアレクシオスに向かって、ルーセルの勇敢さとその才能を高く評価する発言をしている。[63] 彼らにとっても地域の安全を守ってくれるフランク人傭兵部隊の存在は貴重なものだったのであろう。

最後に軍司令官アレクシオス・コムネノスの活動が現地社会に及ぼした影響に

---

[62] Nikephoros Bryennios, p.186f.
[63] *ibid.,* p.194f; J.-C.Cheynet,"Le rôle des Occidentaux",p.127.

ついて考察しておこう。

前にも述べたように、彼のルーセルに対する作戦行動は、フランク人傭兵部隊が占拠する城塞をひとつずつ攻略してゆくことで進められていった。離反する都市も出はじめ、心理的に追い詰められたルーセルは、近くに現れたトルコ人の首領トゥタクに接近を図る。しかし、密かにアレクシオスはこのトルコ人の首領に手を回し、トゥタクとの会見のために彼の野営地を訪ねたルーセルはあえなくトルコ人に捕らえられてしまった。ルーセルの身柄はアレクシオスに引き渡され、後者は必死の工作の末にアマセイア市民たちから集めた身代金をトルコ人に支払ってこの取引を完了させたのである。[64]

シェネも指摘しているように、現地の住民にとって、中央から派遣された司令官のアレクシオスが、本来、侵略者であるはずのトルコ人の首領の助力を得て、これまでこの地域一帯を見事に防衛してきたフランク人傭兵隊長ルーセルの追い落としを図っているのは矛盾以外の何物でもなかった。[65]

そのうえアレクシオスは、ルーセルを捕らえた後、残されたルーセルの部下のフランク人傭兵たちが反乱活動を再開するのを恐れ、彼らが依然保持していた要塞を徹底的に攻略する、という挙に出ている。執拗な攻撃に音を上げた城兵は、城塞をアレクシオスに明け渡して降伏するか、城を捨てて行方をくらませるか、いずれかの道を選んだという。[66]

アレクシオスの配下に充分な兵力があったようには思われないから、フランク人傭兵たちが退去した後、これらの城塞に、彼らに代わる強力な守備隊が配置されたとは到底思えない。言うなれば、アレクシオスがしたことは、ルーセルの支配下ではまがりなりにも有効に機能していたアルメニアコン内の城塞のネットワークを徹底的に破壊し、さらにそれを再構築することもなしに放置する、という現地住民にとっては誠に迷惑極まりない行為だったのである。

アレクシオスの一行がルーセルを伴って首都に向かって去った後、トルコ人の襲撃に対して一切の抵抗の手段を奪われたアルメニアコンの地域社会は無防備のままで取り残されることになった。[67]

---

64 Nikephoros Bryennios, pp.186-195.
65 J.-C.Cheynet,*Pouvoir et contestation*, p.406.
66 Nikephoros Bryennios, pp.192-195.
67 シェネは、マンツィケルト戦以降も小アジア各地の属州に多くのテマ判事が配置されていたことを印章資料から確認し、ビザンツの行政機構がしぶとく存続していたことを立証しようとしている（ちなみにアルメニアコンについては、6 人のテマ判事の印章が提示されている)。しかし、そうした組織がどの程度有効に機能したかについては、資料の性格上、計測することはできず、判断を留保せざる

(4) 小　括

以上の考察を簡単にまとめておこう。

アルメニアコンにおけるルーセル・ド・バイユールの活動は、確かに中央の皇帝政府から見れば、皇帝の権威に対する挑戦、重大な反逆行為と映ったこと間違いない。

しかし、それを地域社会の視座から眺めなおしてみれば、それは、地域の自立した防衛システムの構築を目指す運動、という性格を色濃く帯びていたことも明らかになったと思われる。

ルーセルは、以前から管理下に置いていたアルメニアコン各地の城塞に、配下のフランク人傭兵から成る守備隊を配置して、トルコ人の襲撃を排除した。[68]

これにたいして現地の住民は、フランク人に補給物資を提供したり、租税を支払ったりしてその活動を支援し、軍隊の維持と給養に経済的基盤を与えたのである。

もしもさらにルーセルに今しばらくの時間的な猶予が与えられていたならば、彼がカイサル、ヨハネスを対立皇帝に擁立したときに構想したように、現地のビザンツ官吏や兵士たちの協力を得て、さらにはドケイアノスのような在地の有力貴族の支持をも確保して、さらに安定した支配体制を築いていたかもしれない。後にニケフォロス3世ボタネイアテスがフィラレトス・ブラカミオスに認めたように、ミカエル7世政権がルーセルに対して、皇帝の名目的な宗主権を受け入れることを条件に、後者の実質的に自立した支配権を容認する度量があったならば、これらの地域は、なおしばらくの間、トルコ人に対して頑強に抵抗することも不可能ではなかったのではなかろうか。

だが、そうした魅惑的な夢想は、若き司令官アレクシオス・コムネノスの軍事作戦によって無残に踏みにじられることになる。彼はルーセルに対抗するため、

を得ないが、いずれにしても充分な軍事的バック・アップがない限り、トルコ人の跳梁するなかでこうした文官が業務を遂行することは困難だったであろう。J.-C.Cheynet,"La résistance aux Turcs en Asie Mineure entre Mantzikert et la Première Croisade", *ΕΥΨΥΧΙΑ : Mélanges offerts à Hélène Ahrweiler,* Paris, 1998,pp.131-147,pp.134-139.

[68] ルーセルの採ったこうした防衛策がトルコ人の攻撃に極めて有効だったことは、シェネが指摘するように、アレクシオスの指嗾を受けたトルコ人の首領トゥタクがあえて武力でルーセルを攻撃しようとせず、奸計を用いて彼を捕らえようとした、という挿話からも窺える。攻城兵器を持たぬトルコ人部隊は、たとえ大軍であっても、こうした城塞を容易に攻略することはできなかったのである。*ibid.,* p.132.

後者が築いた地域防衛システムを徹底して破壊した挙句、侵略者であるトルコ人と結託して地域の守護者であるルーセルの身柄を拉致して去ったのである。

アレクシオスの長女アンナ・コムネナが父帝の若き日の最初の功業として称えるルーセルへの作戦行動[69] は、実際にはトルコ人の小アジア侵攻を大きく加速させる要因をつくった出来事であったことを我々は記憶に刻んでおかなければならない。

---

[69] Anna Komnene, *Alexias,* ed.,D.R.Reinsch & A.Kambylis, Berlin, 2001 ,pp. 14-16; Anne Comnène, *Alexiade* ,éd., B.Leib et P.Gautier, 4vols., Paris, 1937-1976, vol.1,pp.12-16. なお、皇帝即位以前のアレクシオスの行動を伝えるアンナの記述は、彼女の夫ニケフォロス・ブリュエンニオスのそれのパラフレーズという性格が強いため、本稿では、より詳細な後者の叙述を主として参照している。

Ⅲ　ニケフォロス・ボタネイアテス

——前方への逃走——

(1)　はじめに

1077 年 10 月 1 日、「令名高く、父祖の武人としての資質を受け継いだ人物であり、膂力と精神力において万人を凌駕し、非常に輝かしい血筋と豊かな富において全東方にある人々の中で最も傑出していた」と歴史家ミカエル・アッタレイアテスに賛美された[1] クロパラテスかつアナトリコン長官[2] のニケフォロス・ボタネイアテスが反乱の兵を挙げた。

「30～40 年以上も公務に携わり、…東西のドメスティコス・トーン・スコローン職を除き、あらゆる重要な指揮官職を歴任していた」[3] 歴戦の老将軍が、この時期に生涯を賭けた危険な冒険に乗り出した理由は必ずしも明らかになっていない。

彼が、総崩れになったカイサル、ヨハネスの軍勢を見捨てて撤退したゾンポス橋の会戦は、もう 3 年も前の 1074 年夏頃の出来事だったと思われるから、彼がこうした背信行為に対して皇帝から懲罰を受けることを恐れて自衛手段に出た、という解釈はおそらく成り立たないだろう。

現代の研究者たちも彼の挙兵の動機を厳密に究明しようという意欲は乏しく、混乱した政情の中で続発した反乱事件のひとつとして片付けられるのが通例である。[4] 管見の限りでは、彼の反乱を正面から論じた独立した論考はひとつもない

---

[1] Michael Attaleiates, *Historia,* ed., I. Bekker, Bonn, 1853, p.185.

[2] ブリュエンニオスは、ボタネイアテスの官職名を「アナトリコンのストラテーゴス」と伝えているが、正確には「アナトリコンのドゥクス」であったことが印章資料から確認されている。 cf. Nikephoros Bryennios, *Historiarum libri quattuor,* éd., P. Gautier, Bruxelles, 1975, p.236f; G. Zacos & A. Veglery, *Byzantine Lead Seals,* vol.I, Basel, 1972, no.2790bis, p.1467. ちなみにストラテーゴスはビザンツ中期のテマ体制の下での管区司令官、ドゥクスは配下に精鋭のタグマ軍（職業軍人で構成されたエリート軍団）を置いた高位の軍司令官の名称であり、11 世紀には前者から後者への転換が帝国全域で進行していた。 cf. J.-C. Cheynet, "Du stratège de theme au duc: chronologie de l'évolution au cours du XIe siècle", *Travaux et Mémoires,* 9, 1985, pp.181-194.

[3] J.-C. Cheynet, *Pouvoirs et contestations à Byzance (963-1210),* Paris, 1990, p.351

[4] たとえば、以下のような通史の記述は異口同音にミカエル 7 世政権の混乱と相次ぐ軍事反乱を報じている。 G. Ostrogorsky, *Geschichte des byzantinischen Staats,* 3Aufl., München, 1963, S.287-288（邦訳：ゲオルグ・オストロゴルスキー

有様であり、この点において、本来のビザンツ人と異なる民族的背景を有した同時代のフィラレトス・ブラカミオスやルーセル・ド・バイユールの反乱に関して寄せられた関心とは対照的な様相を呈している。

しかし、彼の反乱は詳細に分析するに値しない陳腐な出来事だったのか、と問うならば、答えは決してイエスではない。彼の反乱の経過をつぶさに追うことで、彼を支持したフリュギア地方を中心とした小アジア中西部の有力貴族たちの動向や、彼が都での進軍の途中に通過した小アジア西部の諸都市の情勢などを我々は解明することができるのである。

また、この時代の小アジア情勢の実態を探る、という今回の研究の主題からはいささか逸れるが、ボタネイアテスを皇帝として受け入れることを決定付けた首都コンスタンティノープルの騒乱の経過を再構成することも重要な課題となるだろう。というのも、この事件の分析を通じて、我々はこの時期のビザンツ政局に重大な影響力を行使した首都の政治勢力の実像に迫ることができるからである。

最初に、ボタネイアテスの反乱を支えた小アジアの有力貴族たちのプロソポグラフィー的な調査から始めることにしよう。というのも、史書が伝えるところによれば、ボタネイアテスが反乱に乗り出したのは、他ならぬ彼らの支援と後押しがあったからなのであった。彼らの社会的な位置や当時の境遇を可能な限り精細に調べ上げることで、彼らが主体を成したボタネイアテスの反乱の性格もおのずと明らかになってくるのではないだろうか。

(2) 反乱の支援者たち

「 このように事態は推移し、為政者が愚劣で悪徳に耽っている間、内外の敵が掠奪や襲撃を重ねていたとき、東方における主だった人々、アレクサンドロス・カバシラス、ストラボロマノス、シュナデノス家の人々、グーデリオスその他の元老院貴族の中でも選り抜きの人々――彼らは以前から[中央政府から]離反していたのだが――は、今や、この事業を実現することに奮闘し、一堂に会して、クロパラテスのニケフォロス・ボタネイアテスを皇帝に宣言した。」[5]

著、和田廣訳『ビザンツ帝国史』、恒文社、2001年、448 - 449頁); P.Charanis,"The Byzantine Empire in the Eleventh Century",in K.M.Setton ed.,*A History of the Crusades,* vol.1, 2ed., Madison, 1969, pp.177-219, p.199; W.Treadgold, *A History of the Byzantine State and Society,* Stanford,1997,p.607.

[5] Skylitzes Continuatus, *Ἡ Συνέχεια της χρονογραφίας* ,ed., E.T.Tsolakis,

続スキュリツェスのこうした記述に従えば、ボタネイアテスは、必ずしも彼個人の政治的野心からではなく、それ以前から皇帝政府から離反していた貴族たちに推されたために、対立皇帝の名乗りを上げたことになる。

それゆえ、先にも述べたように、この反乱を主体的に担った人々の構成を通覧すれば、今回の反乱の性格を究明するのに大いに資することが期待できるのである。そこで、以下では、続スキュリツェスに名前を挙げられた貴族たちのプロフィールを、J.-C.シェネの先行研究から得られる情報[6] に筆者自身の集めた知見を加えて整理することにしたい。最初に続スキュリツェスが揚げた４つの家系のうち、ボタネイアテスとの縁戚関係が知られているシュナデノス、グーデリオス、ストラボロマノスの３つの家門について語り、ついでカバシラス家についての検討に移ることにしよう。

さらにこれに加えて、続スキュリツェスには明示されていないが、反乱の初期の段階ではボタネイアテスの配下にあったと思われる２人の貴族やその縁戚者をめぐる考察を加えれば、ボタネイアテスの反乱をめぐって形作られた人的関係の全体像が浮かび上がってくることが期待されるのである。

シュナデノス家

ボタネイアテスの盟友たちの中で彼との縁戚関係が最も明確に確認できるのがシュナデノス家である。同家のテオドゥロスは、ボタネイアテスの姉妹と結婚しており、それゆえ後者とは義理の兄弟の関係にあった。[7] 続スキュリツェスは反乱に参加したシュナデノスを複数形で表現しているので、ここにはテオドゥロスに加え、彼の息子と思われるニケフォロス・シュナデノスが少なくとも加わっていたと思われる。[8]

シュナデノスの家名はフリュギア地方の中心的な都市のひとつ、シュナダに由来しており、同家の成員は 11 世紀前半以来、カッパドキアやデュラキオンのストラテーゴス[9] を輩出した有力な軍事貴族の家系であった。

Thessalonike,1968,p.171f.

[6] J.-C.Cheynet,*Pouvoirs et contestations*, p.217f,p.351.

[7] Skylitzes Continuatus, p .185.

[8] cf. Ch.Hannick und G.Schmalzbauer, "Die Synadenoi: Prosopographische Untersuchung zu einer byzantinischen Familie", *Jahrbuch der österreichischen Byzantinistik,*25,1976,S.125-161,S.128-129.

[9] 「ニケフォロス・シュナデノス、アンテュパトス、パトリキオス、カッパドキアのストラテーゴス」 cf.G.Schlumberger,*Sigillographie de l'empire byzantin,* Paris,1884 (Torino,1963),p.705. 「バシレイオス・シュナデノス、プロートスパタリオス、デュラキオンのストラテーゴス」(1040) cf,Ioannes Skylitzes, *Synopsis Historiarum,* ed., H.Thurn, Berlin, 1973, p.410; J.Nesbitt & N.

また、タルソスで発見されたミカエル・シュナデノスの印章が、J.-C.シェネが推測しているように、1060年代にアンティオキア長官を務めたニケフォロス・ボタネイアテスの幕僚としてのものだった、という仮説が受け入れられるならば、両家の結び付きの強さを裏付けるさらなる傍証になるだろう。[10]

グーデリオス家[11]

この家系については、同家の成員の一人がボタネイアテスの孫娘と結婚していたことが知られている。[12]

史料中で最初に確認される同家の成員は、1026年、皇帝コンスタンティノス8世(在位 1025－1028)に対する陰謀事件の中で登場する。[13] この陰謀には、旧ブルガリア王家、特に最後のブルガリア王イヴァン・ヴラディスラブの息子プルシアノスに所縁のある人々[14] が連座していたため、そこに名を連ねている初代グーデリオスも、当時、ビザンツに服属していたブルガリア貴族の一員だったと想定する意見が有力である。

この陰謀の連座者のひとり、ボグダノスに関して、ブルガリアの研究者ニコロフは、テマ・ブケラリオン（小アジア中北部、中心都市はアンキュラ）のストラテーゴスに任命されたプルシアノスと行動を共にしていたのではないかと推定し

Oikonomides, *Catalogue of Byzantine Seals at Dumbarton Oaks and in the Fogg Museum of Art,* vol.1,Washington,D.C.,1991,no.12.8,p.43; cf.Ch.Hannick und G.Schmalzbauer, "Die Synadenoi",S.128.

10 J.-C.Cheynet, "Sceaux byzantins des musées d'Antioche et de Tarse", *Travaux et Mémoires,* 12, 1994, pp.391-478, no.77, p.438.

11 この家系は、史料中でグーデリオスとグーデレスという2通りの呼称を帯びて登場しているが、姓名の表記に明確なルールのなかった当時のビザンツでは、そうした事例は珍しいことではなかった（他にトルニキオスとトルニケス、バシラキオスとバシラケスなど)。なお煩雑さを避けるため、以下の本文では、史料からの引用を除き、グーデリオスの呼称で統一することにする。

12 典拠は、S.Lampros,"'Ο Μαρκανς κωδιξ 524",*Νέος Ἑλληνομνήμων,*8,1911, pp.3-59,pp.113-192,p.152. [ただし筆者未見、J.-C.Cheynet, *Pouvoirs et contestations,*p.351,n.78 による]

13 Ioannes Skylitzes, p .372.

14 陰謀の参加者としてスキュリツェスは、グーデリオスを含め4人の人物の名を挙げている。残りの3人の内、ロマノス・クルクアスは、姉妹を介してプルシアノスと義兄弟の関係にあり、ボグダノスは、1018年にビザンツに降伏してパトリキオスの爵位を皇帝から授けられたブルガリア貴族、そして最後のグラバスも、スラヴ系の姓を持ち、以前にブルガリア王と内通が疑われたこともあるバルカンの貴族家系の成員だった。cf. Ioannes Skylitzes, p p.343,357f,372; A.Kazhdan, "Glabas",in A.Kazhdan ed.,*The Oxford Dictionary of Byzantium,* New York - Oxford,1991, p.851f.

ている[15] が、同じことが初代グーデリオスにも当てはまるとすれば、同家の小アジア進出もこの時期のことと考えることができるだろう。

いずれにせよ、1034 年に別の陰謀事件に連座した某グーデレスは、テマ・オプシキオン（小アジア北西部、いわゆるビテュニア地方）に所領を有したと考えられること[16]、 また、同家の係累に属すると思われる 11 世紀中葉の有名な将軍、ゲオルギオス・マニアケス[17] は、テマ・アナトリコンに所領があったこと[18]、などを勘案すれば、11 世紀中葉までに同家は小アジア中西部に定着し、地域の有力家門としての地歩を築きつつあったと考えても大過あるまい。

この時期、この家系からは複数の軍司令官が出ており、また、同格の軍人との間に通婚関係があったことが印章史料から確認されている。[19] かくして、時を経るにしたがって、グーデリオス家は小アジアの軍事家門としての地位を固めていったのであり、そうしたなかでボタネイアテス家を始めとする在地家門との関係も深めていったのであろう。

ストラボロマノス家

第三の家門、ストラボロマノス家は、フリュギア地方のペンタポリスを本拠とし、同家のロマノスは、ボタネイアテスの親族（シュンゲネース）だった。[20] この家門は新興の家系だったらしく、彼が史料上で確認できる最初の同家の成員である。[21]

彼はボタネイアテスの反乱に加わる前はミカエル 7 世の廷臣として仕えていた

---

15 G.N.Nikolov,"The Bulgarian Aristocracy in the War against the Byzantine Empire", in G.Prinzig, M.Salamon & P.Stephenson ed.,*Byzantium and East Central Europe,* Cracow,2001,pp.141-158,p.144.

16 J.-C.シェネの推定しているところによれば、皇帝ミカエル 4 世（在位 1034－1041）の兄弟コンスタンティノスがオプシキオンに所有していた所領は、もともとグーデレスらのものであったが、陰謀事件を機に皇帝に没収され、コンスタンティノスに下賜されたものだったという。 cf.J.-C.Cheynet, *Pouvoirs et contestations*,p.224；Ioannes Skylitzes,pp.396,416.

17 彼の父の名は、「グーデリオス」だった、と伝えられている。Ioannes Skylitzes, pp.387.

18 *ibid.*,p.427.

19「レオン・グーデレス、プロートスパタリオスかつストラテーゴス」(И.Иорданов, *Печатите от стратегията в Преслав (971-1088),* София,1993, стр.174-175)、「クリストフォロス・グーデレス、マギストロスかつストラテーゴス」(V.Laurent, *Documents de sigillographie byzantine. La collection C.Orghidan,* Paris,1952, no.336,p.172.)、「マリア・グーデリナ、ストラテギッサ」(W.Seibt und M.L. Zarnitz,*Das byzantinische Bleisiegel als Kunstwerk. Katalog zur Ausstellung,* Wien,1997,Nr.1.2.4,S.49.)

20 Nikephoros Bryennios,p.260f.

21 ストラボロマノスとは「眇めのロマノス」の意であり、この初代ロマノスの綽名に由来して成立した家名だったのかもしれない。

らしく、この皇帝の外交使節として南イタリアのノルマン人の首領ロベール・ギスカールの宮廷を訪問している。[22]

彼に対してボタネイアテスが多大な信頼を寄せていたことは、後者が皇帝に登位した後、皇帝の身辺警護を任務とするメガス・ヘタイレイアルケスの地位に彼を任じていることからも窺える。[23]

カバシラス家

反乱の支持者のうち、唯一、ボタネイアテス家との縁戚関係が確認できないカバシラス家も、過去に複数の将軍を輩出した軍事貴族の家系であった。[24]

同家は非ギリシア系の出自であり、11 世紀前半に生きたコンスタンティノス・カバシラスは、皇帝コンスタンティノス 8 世の「従者（テラポーン）」の一人、と伝えられている[25] ので、同家は、皇帝への奉仕を通じて社会的上昇を果たした家門と言えるだろう。

J.-C. シェネが推測しているように、11 世紀後半、今回のボタネイアテスの反乱に参加したアレクサンドロス・カバシラスが主に小アジア西部で行動していたことは、この地域に自己の領国を樹立しようとしていたトルコ人の首領ツァカスをその手で捕らえた、というアンナ・コムネナの記述[26] から窺い知ることができる。[27] 彼の本拠地を厳密に特定することはできないが、それが、ボタネイアテスら、フリュギア地方に基盤を有する貴族たちの勢力圏の比較的近くにあったと

---

22 Skylitzes Continuatus,p.167.

23 Michael Attaleiates,p.286. メガス・ヘタイレイアルケス職に関しては、以下の文献を参照。P.Karlin-Hayter,"L'hétériarque. L'évolution de son role du *De Ceremoniis* au *Traité des Offices*", *Jahrbuch der österreichischen Byzantinistik,* 23,1974,pp.101-143 ; N.Oikonomidès,*Les listes de préséance byzantines des IXe et Xe siècles,* Paris,1972,p.327f.

24 1022 年頃、ニケフォロス・カバシラスはテッサロニケのドゥクスだった。Ioannes Skylitzes, p .368. また、1033 年頃にコンスタンティノス・カバシラスは、東方国境のヴァスプラカンの長官、ついで 1042 年頃に西方のドゥクスを務めている。K.Yuzbashian,"L'administration byzantine en Arménie aux Xe- XIe siècles",*Revue des études arméniennes, N.S.,* 10, 1973-1974, pp.139-183, p.149f ; W.Felix,*Byzanz und die islamische Welt im früheren 11,Jahrhundert,* Wien,1981,S.146-147 u. Anm.146 ; Ioannes Skylitzes, p .422.

25 Michael Psellos,*Chronographie,*éd.,E.Renauld,2éd.,Paris,1967,vol.1,p.108.

26 Anna Komnene,*Alexias,* ed.,D.R.Reinsch & A.Kambylis,Berlin,2001,p.225 ; Anne Comnène,*Alexiade,*éd.,B.Leib et P.Gautier,4vols,Paris,1937-1976,p.114. この箇所は、『アレクシアス』の原文では、「アレクサンドロス・カバリカス」（τοῦ Καβάλικα 'εκείνου 'Αλεξάνδρου）となっているが、これを転写ミスとして、「カバシラス」に修正することを提案するランブロスの見解に従っておく。 Sp. Lambros,"Alexander Kabasilas",*Byzantinische Zeitschrift,* 12,1903,S.40-41; cf. Anna Komnene,*Alexias,* Übers.von D.R.Reinsch,Köln,1996,S.256,Anm.119.

27 J.-C.Cheynet, *Pouvoirs et contestations,*p.217f.

考えることは可能であろう。

その他の諸家門

史家ミカエル・アッタレイアテスは、ボタネイアテスの軍勢の中から「強力な戦力を持ち、多数の軍勢を誇る彼の配下(ヒュポストラテーゴス)の将軍たちのうちの２人」が、ボタネイアテスを捕捉しようとするトルコ人部隊を恐れて、密かに配下の兵と共に陣を離脱したと伝えている。[28]

アッタレイアテスが名前を明らかにしていないこの２人の部将に関して、P.ゴーティエは、史家ニケフォロス・ブリュエンニオスの伝える、小アジアにおいてボタネイアテスの反乱に反対し、首都のミカエル７世へ忠誠を表明した２人の貴族、すなわち、ニケフォロス・メリッセノスとゲオルギオス・パラエオロゴスがそれに該当するに違いないと論じている。[29]

こうした推論が受け入れられるのであれば、彼ら２人は、少なくとも反乱の初期の段階ではボタネイアテスの徒党に加わっていたことになるので、ここで併せて検討を加えておくことが妥当だろう。

この２人のうち、ゲオルギオス・パラエオロゴスは、ボタネイアテス家やシュナデノス家と同じフリュギア地方に本拠を有し[30]、彼の父ニケフォロスは、後のニケフォロス３世ボタネイアテス政権でも皇帝の熱心な支持者だった[31]から、本来、彼の家門はボタネイアテスの徒党とかなり強固な結び付きを有していたことが推定される。

では、なぜ彼が父と対立する政治路線を選んだのだろうか。

彼とカイサル、ヨハネス・ドゥーカス（皇帝ミカエル７世の叔父）の孫娘アンナとの結婚[32] が、この時期以前に成立していれば、こうした婚姻を通じた政治的同盟関係が彼の決断に大きな影響を与えたことは間違いないだろう。しかし、両者の婚姻成立は 1081 年以前であることしか分かっておらず、しかもアンナの生年は 1068 年頃と想定されている[33] から、あまり早い時期にその成立を遡らせるのにはためらいを覚えざるを得ない。[34] 彼とアンナとの婚約は、彼がドゥーカス

---

[28] Michael Attaleiates,p.263f.
[29] Nikephoros Bryennios,p.239,n.7.
[30] Pseudo-Luciano,*Timarione,* a cura di R.Romano,Napoli,1974,p.57.
[31] Anna Komnene, ed.,D.R.Reinsch & A.Kambylis,pp.69,83-86 ; Anne Comnène,éd.,B.Leib et P.Gautier,vol.1,pp.80,97-101.
[32] Anna Komnene, ed.,D.R.Reinsch & A.Kambylis,p.69; Anne Comnène, éd., B.Leib et P.Gautier,vol.1,p.80.
[33] D. I. Polemis, *The Doukai. A Contribution to Byzantine Prosopography,* London, 1968, p.74f.
[34] ちなみにアンナの姉エイレーネー・ドゥカイナ（1066 年生まれ）とアレクシ

家の政権を支持した原因だったのではなく、その結果を受けて結ばれた可能性もあるのである。

むしろここでは、彼の家系は父ニケフォロスに発する比較的新興の家柄であり、家門の興隆は、ミカエル7世政権下でこのニケフォロスが重要な職務を果たし[35]、ドゥーカス家の政権に協力する中で端緒が開かれたことを、考慮すべきかもしれない。

父のニケフォロスがミカエル7世政権に奉仕したのは、フリュギア貴族の領袖であるボタネイアテスがアナトリコン長官を務めたのと同様、あくまでも政権と同盟関係にあった貴族門閥の一員としてのものであったのに対し、息子のゲオルギオスは、そうした派閥の枠組みを脱して、より直接的に政権を握るドゥーカス家との連携を図った、と考えることも可能だろう。[36]

バルカンと小アジアの家門間の通婚が稀であった当時[37]において、アドリアノープルに本拠を持つバシレイオス・クルティキオス[38]とゲオルギオスが姻戚関係にあったこと[39]も、地縁的なまとまりにとらわれないパラエオロゴス家の性向を示すものと言えるだろう。

父と息子が互いに対立する陣営に属したパラエオロゴス家に関しては、多くの

オス・コムネノスの婚約が成立したのは1077年、つまり、エイレーネーが11歳のときだった。 Nikephoros Bryennios,pp.218-225；D. I. Polemis, *The Doukai*, p.70; B.Skoulatos,*Les personages byzantins de l'Alexiade. Analyse prosopographique et synthèse,* Louvain,1980,p.120.

[35] さきにルーセル・ド・バイユールの反乱について論じた際に触れたように、ニケフォロス・パラエオロゴスは、皇帝ミカエル7世の皇妃マリアの生国グルジアに派遣され、傭兵の徴募活動を行った。 Nikephoros Bryennios,p.182f. その後、彼はメソポタミアの長官に任じられ、このときには息子のゲオルギオスも、任地に同行したという。*ibid.*,p.238f.

[36] 彼とドゥーカス家との同盟関係は、上述したように、彼とアンナ・ドゥカイナの婚約が結ばれたことで、いっそう強固なものとなる。本拠地を同じくするフリュギア貴族たちの利害よりもドゥーカス家との同盟関係を優先させる彼の政治的姿勢は、ドゥーカス家の支持するアレクシオス・コムネノスの反乱に彼が加担し、ボタネイアテス政権の打倒に取り組んだときに再度、明らかにされることになる。 J.-F.Vannier,"Les premiers Paléologues. Étude génélogique et prosopographique", dans J.-C.Cheynet et J.-F.Vannier, *Études prosopographiques,* Paris.1986,p.137f；B.Skoulatos,*Les personages byzantins,*pp.99-102.

[37] cf. J.-C.Cheynet, *Pouvoirs et contestations,*pp.261-279.

[38] Anna Komnene, ed.,D.R.Reinsch & A.Kambylis,p.156; Anne Comnène, éd., B.Leib et P.Gautier,vol.2,p.26；B.Skoulatos,*Les personages byzantins,*p.43.

[39] 両者は互いに従兄弟（'εξάδελφος）の関係にあった。 Nikephoros Bryennios, p.302f. ヴァニエは、ゲオルギオスの母親がクルティキオス家の出身だったと想定しているが、バシレイオス・クルティキオスの母がニケフォロス・パラエオロゴスの姉妹であった可能性もある。 J.-F.Vannier,"Les premiers Paléologues", p.135.

思惑や利害関係が錯綜していたことを窺わせるのに対して、ニケフォロス・メリッセノスが皇帝方に付いた理由を探すのは比較的容易である。

なぜなら、彼は、当時、ミカエル7世政権の支柱であったコムネノス一族の縁者として、後者と利害を共にする関係にあったからである。[40] 彼が軍人としてキャリアを積み上げていった際にも、政権の中枢を占めるコムネノス家との同盟関係が重要な意味を有したことは想像に難くない。[41]

史家ブリュエンニオスの伝えるところによれば、ニケフォロス・メリッセノスの父親は小アジアの有力家門ブルツェス家の成員だったが、彼自身は母方のメリッセノスの姓を名乗ったという。[42] これを受けて、W. ザイブトは、1060～70年代のものと推定される「マリア・メリッセネー、ゾーステー・パトリキア」という印章の持ち主が彼の母親である可能性があると論じている。[43] この称号は皇后に仕える高位の女性用爵位[44] であるから、もしも、ザイブトの見解が受け入れられるのであれば、彼と皇帝宮廷の結び付きの強さを裏付ける新たな傍証になるだろう。

ミカエル7世政権は、フリュギア地方北西部の交通上の要衝ドリュライオンに本拠を持つメリッセノス[45] が反乱軍の進撃を阻止することを期待したようであ

---

40 彼はすでに1066年頃、アレクシオス・コムネノスの姉エウドキアと結婚しており、1070年、コムネノス兄弟の長兄マヌエルが小アジアに遠征した際には、もうひとりの義兄弟ミカエル・タロニテスと共にこれに同行していた。Nikephoros Bryennios, pp.84f,100f,300f.

41 これ以前の彼の経歴は、印章資料からある程度、復元できる。それによれば、彼はマギストロスとヴェスタルケスの爵位を帯び、トリアディツァ(現在のソフィア)のストラテーゴス職を務めていた。cf.G.Zacos & A.Veglery, *Byzantine Lead Seals,* vol.I,no.2697,no.2697bis,p.1480f.

42 Nikephoros Bryennios, pp.84f,300f. 他方、スクーラトスは、後代の年代記史料から、ニケフォロスの父の名をレオステネス・メリッセノスと報じている。cf. B.Skoulatos,*Les personages byzantins,*p.240. なお、メリッセノス家は8世紀にまで遡るビザンツでも有数の古い家門だったが、10世紀後半にバシレイオス2世（在位976-1025）に対する反乱に加担し、これが失敗に終わった後はやや家運が低迷していた。10世紀以前の同家の歴史については、さしあたり、S.Stavrakas, *The Byzantine Provincial Elite. A Study in Social Relationships during the Ninth and Tenth Centuries,* Ph.D.thesis,The University of Chicago, 1978, pp.37-42 を参照。

43 W.Seibt,*Die byzantinische Bleisiegel in Österreich,1Teil: Kaiserhof,* Wien, 1978.S.261.

44 cf.R.Guiland,"Patricienne à ceinture",*Byzantinoslavica,*32,1971,pp.269-275 (＝R.Guilland,*Titres et fonctions de l'Empire byzantin,* London,1976,XXVI)

45 彼の本拠がドリュライオンにあったことは、Ioannnes Kinnamos, *Epitome rerum ab Ioanne et Alexio [Manuele] Comnenis gestarum,*Bonn,1836,p.294 を参照。

る。皇帝は彼を「プロートプロエドロスかつアナトリコンのモノストラテーゴス」に任じ、反逆したボタネイアテスに代わって小アジアの全軍の指揮権を彼に委ねたのである。[46]

ボタネイアテスの軍勢が都に上った後、メリッセノスは一時、コス島に滞在していたことが知られている。[47] これが、ゴーティエの推測する[48] ように、皇位に登ったボタネイアテスによって追放されたためか、それとも後者の追及を逃れるために自ら退避した結果なのかは不明と言わざるを得ないが、いずれにしても、その事実は、彼が最後までボタネイアテスの反乱に抵抗する姿勢を示したことの証左にはなるはずである。

さて、最後にメリッセノス家と縁戚関係にあったブルツェス家の動向についても一瞥を加えておこう。

同家の成員がボタネイアテスの反乱参加者の中に姿を見せていないことは、彼らがニケフォロス・メリッセノスと行動を共にしていたのだと考えれば理解しやすい。事実、1081 年にメリッセノスが、皇帝となったアレクシオス・コムネノスからテッサロニケの町を授けられ、バルカンに生活の場を移した際に、彼に従って西方属州に移り住んだブルツェス家の成員がいたことをアトス山修道院文書は伝えている。[49]

しかし、その一方で、同家の成員の中にはそうした行動に加わらず、小アジアに踏みとどまることを決意していた人物も存在した。1081 年、皇帝アレクシオス

---

[46] V.Laurent, *Documents de sigillographie byzantine. La collection C. Orghidan*, no.196,p.106f. なお、シェネは、「アナトリコンのモノストラテーゴス」という称号は、通常のアナトリコン長官よりも広範な指揮権を含意しており、まだトルコ人に占領されていなかった地域の全軍の指揮権が彼に付与された、と推定している。J.-C.Cheynet,"Du stratège de theme au duc",p.187,n.42.

ちなみに、P.シュライナーは、メリッセノスの「アナトリコンのモノストラテーゴス」就任はニケフォロス 3 世ボタネイアテスの治下と想定している。しかし、常識的に考えれば、ニケフォロス 3 世が、自己の権力奪取に抵抗した人物を自分の本拠地でもある小アジアの最高司令官に任命することなど考えられないだろう。P. Schreiner, "Eine Schlacht bei Mylasa im Jahre 1079/80? Ein Beitrag zur Erforschung der Region von Milet",in *ΕΥΨΥΧΙΑ: Mélange offerts à Hélène Ahrweiler,* Paris,1998,pp.611-617,p.615.

[47] Nikephoros Bryennios, p.300f.

[48] *ibid.*,p.301,n.3.

[49] N.Oikonomidés éd.,*Actes de Docheiariou (Archieves de l'Athos XIII)*,Paris, 1984,no.4,pp.73-88 ; J.-C.Cheynet,"Trois familles du duché d'Antioche", dans J.-C.Cheynet et J.-F.Vannier, *Études prosopographiques,* Paris.1986,pp.7-122 p.40. 拙稿「ビザンツ属州行政と名望家層――コムネノス朝期のテッサロニケ地域を中心に――」、『金沢大学文学部論集 史学・考古学・地理学篇』21 号、2001 年、1－34 頁、特に 12－13 頁も併せて参照のこと。

1 世はバルカンに侵攻したノルマン人の軍勢に対抗するため、小アジアの「カッパドキアとコーマのトパルケス」ブルツェスに軍を率いて来援するよう要請しているのである。[50]

ここで注目されるのが、このトパルケスが帯びている「コーマ」という地名である。というのも、ボタネイアテスが率いた反乱軍の軍勢は、首都に入城した後、その出身地の名から「コマテノイ」と呼ばれることが知られているからである。[51] すなわち、トパルケスのブルツェスは、1081 年当時、ボタネイアテスの反乱軍の主力部隊を提供した地域を支配下に収めていたことになる。[52] このことは何を意味しているのだろうか。

シェネは、このトパルケスを、アモリオンに近いオルキストスで発見された碑文に刻まれていた「ミカエル・ブルツェス、ヒュパトスかつトポテレーテス」という人物に同定できると論じている。[53] 彼が語るところによれば、この時期、タグマタ軍団の副官を意味するトポテレーテスとトパルケスという称号は、しばしば相互に交換可能な呼称なのであり、ブルツェスは親族であるニケフォロス・メリッセノスの副官としてカッパドキアとコーマを治めていたのだという。

だが先にも見たように、ボタネイアテスの反乱が成功した後、メリッセノスが一時、コス島に退去せざるを得なかったのに対して、このトパルケスは一貫して地域の支配権を保持していたように思われること、また、メリッセノスがバルカン属州に去った後も、小アジアに留まるという判断を下していること、などを考え合わせれば、このトパルケスは、むしろボタネイアテスの副官として留守を任された、と考える方が妥当であろう。碑文が見つかったオルキストスの辺りが彼

---

[50] Anna Komnene, ed.,D.R.Reinsch & A.Kambylis,p.110; Anne Comnène, éd., B.Leib et P.Gautier,vol.1,p.131 ; B.Skoulatos,*Les personages byzantins,* no.23, p.34f. トパルケスとは、当時、辺境地帯の都市や城塞に拠りつつ、中央から半ば独立した支配権を行使していた地方長官や君侯に付された呼称である。cf. J.-C.Cheynet,"Toparque et topotèrètes à la fin du XIe siècle",*Revue des Études byzantines,* 42,1984,pp.215-224. なお、カッパドキアとコーマは、地理的に相当隔たった地域にあり、トルコ人が横行し、交通が遮断されがちな当時において、こうした２つの地域を同一の指揮官が同時に支配することができたかは極めて疑問である。シェネは、ここで問題になっているのは地理的な領域というよりも、「カッパドキアとコーマ」のタグマタ（軍団）のことではないかと推測している。*ibid.*,p.219,n.31.

[51] Nikephoros Bryennios, pp.264f,270-273 ;Anna Komnene, ed.,D.R.Reinsch & A.Kambylis,p.21; Anne Comnène, éd., B.Leib et P.Gautier,vol.1,p.21f.

[52] あるいは、前註 50 でシェネが推定するように、ブルツェスは「コーマのタグマ」（＝コマテノイ）を指揮下に置いていたのだとすれば、この軍団は、ボタネイアテスとブルツェスの間で分割されていたことになるだろう。

[53] J.-C.Cheynet,"Toparque et topotèrètes",pp.211-223 ;Id. "Trois familles du duché d'Antioche",p.44.

の本拠であったとすれば、彼はフリュギア地方の北部に自己の勢力の基盤を置いていたことになる。[54]

最後に、以上の考察から浮かび上がってくるボタネイアテスの反乱支持者たちの全般的な特徴をまとめておこう。

第一に確認できることは、シュナデノス家やグーデリオス家、ストラボロマノス家といったボタネイアテス家と婚姻関係で結ばれた諸家門を核に、フリュギア、さらには小アジア中西部に本拠を持つ有力家門が結集していたことである。[55] その意味で今回の反乱は、地縁と血縁で結ばれたフリュギア貴族連合の反乱なのである。地縁集団という観点で見れば、ボタネイアテス以外は大きく顔ぶれを異にしているとはいえ、今回の反乱は、1057 年にイサキオス・コムネノスを支持して挙兵したテマ・アナトリコンの貴族同盟[56] の再現とも言えるだろう。

だが、こうした家門連合は一枚岩の団結力を示すものでなかった。フリュギア地方北部に拠るブルツェスが首都への進軍に同行せず、さらに北方のドリュライオンを制するメリッセノスが公然と抵抗の姿勢を示したことは、フリュギア地方の中心部から離れるにつれて集団の求心力が低下してゆくかのような印象を与えている。パラエオロゴス家の内部では父子の間で意見が対立した。こうした有力家門は地域内部においては互いに勢威を競い合うライヴァルでもあったから、日頃の対立がこうした局面でも尾を引く場合もあったかもしれない[57]。

---

[54] 1116 年、アレクシオス 1 世の将軍バルダス・ブルツェスは、アモリオン近郊の平野部でトルコ人を撃破した後、かつて彼の父が支配した町を訪ねた、というアンナ・コムネナの記述も、この地域一帯に同家の本拠があったことを裏付けている。 Anna Komnene, ed.,D.R.Reinsch & A.Kambylis,pp.471-473; Anne Comnène, éd., B.Leib et P.Gautier,vol.3,pp.200-202.

[55] フリュギアに本拠があったことが確認できるのは、ボタネイアテス、シュナデノス、ストラボロマノス、パラエオロゴス、メリッセノス、ブルツェスの各家門であり、正確な本拠の所在地が確認できないグーデリオス家やカバシラス家も、上述したように、小アジア中西部に本拠があった可能性が高い。

[56] 1057 年の反乱には、アナトリコンから、ボタネイアテス以外に、プロエドロスのロマノス・スクレロス、ヴェスタルケスのミカエル・ブルツェス、それにバシレイオス・アルギュロスの息子たちが参加した。Ioannes Skylitzes,p.483, 488.

[57] 今回の反乱に関してではないが、次のような事例が想起されるだろう。

1057 年のイサキオス・コムネノスの反乱の際、テマ・アナトリコンの貴族の多くは反乱支持の立場を示したのに対して、テオフュラクトス・マニアケスは都の皇帝陣営に走った。そうした彼の行動は、かねてアナトリコン内の所領の境界紛争でマニアケス家と対立していたロマノス・スクレロスが反乱派の中心メンバー占めていたことと決して無関係ではなかったと思われる。cf. Ioannes Skylitzes,p.427, 492. 先に述べたようにグーデリオス家とマニアケス家との間に何らかの縁戚関係が認められるとすれば、今回の反乱におけるスクレロス家の不在は何か象徴的

もうひとつ注目すべき事実は、反乱参加者の中にアナトリコン長官だったボタネイアテス以外にも、メソポタミア長官を務めたニケフォロス・パラエオロゴスや南イタリアのノルマン宮廷への外交使節を務めたストラボロマノスなど、ミカエル7世政権に仕えた人々を何人も見い出せることである。シュナデノス家にしても、テオドゥロス・シュナデノスの娘がビザンツ宮廷からハンガリー王ゲーザ1世に輿入れしたのはこの時期と推定される[58]ので、首都の皇帝政権と全くの没交渉だったとは思われない。また、反乱に関して微妙な態度をとったブルツェス家も、1073年にパトリキオス、アンテュパトスの爵位を帯びたテオグノストス・ブルツェスがバルカン戦線で活躍している姿が確認されている。[59]

こうして見ると、ボタネイアテス派の面々は、ある時期まではミカエル7世政権に協力的な態度をとっており、その後、次第に政権に見切りをつけるようになっていったことが窺える。おそらく、その分岐点を成したのは、ボタネイアテスが、敗北したカイサル、ヨハネスの軍を見捨てて撤退した1074年夏頃のことであろう。[60]

彼らは、政権内で活動していた間に皇帝宮廷や首都の様々な政治勢力の間に知遇を広げていたに違いない。こうした過程で、たとえばゲオルギオス・パラエオロゴスのように政権との連携を深め、派閥から脱落する者が出る一方で、ボタネイアテス支持派の人々は、首都内の情報を集め、反乱に呼応した暴動を都の中で発生させるのに必要な協力者の確保に成功したのである。

また、おそらく偶然の一致に過ぎないとはいえ、ミカエル7世政権に仕えたボタネイアテス派の人々が、南イタリアのノルマン宮廷を訪れたストラボロマノス、ハンガリーとの婚姻同盟の当事者だったシュナデノス、グルジア宮廷に募兵に赴いたニケフォロス・パラエオロゴスと、いずれも帝国周辺の諸国との外交交渉に関

なことのようにも感じられる。

[58] cf.J.Shepard, "Byzantium and the Steppe-Nomads: The Hungarian Dimension" ,in G.Prinzing und M.Salamon Hersg.,*Byzanz und Ostmitteleuropea,* Wiesbaden,1999,pp.55-83,pp.72-83.

[59] Skylitzes Continuatus, p.164 ; J.-C.Cheynet, "Trois familles du duché d'Antioche", no.19, p.43.

[60] ビザンツとノルマン両王家間の婚姻同盟を取り決めたストラボロマノスの南イタリア訪問も、1074年のことと思われる。cf.A.Koila-Dermitzaki,"MichaelVII Doukas,Robert Guiscard and the Byzantine-Norman Marriage Negotiations", *Byzantinoslavica,* 58,1997,pp.251-268. 他方、ニケフォロス・パラエオロゴスは、ボタネイアテスの反乱が勃発する直前までメソポタミアの長官職を務め、息子ゲオルギオスと共に任地にあったらしい。 Nikephoros Bryennios, pp.238f. 続スキュリツェスが語る反乱支持者の中に彼の名前がないのは、おそらくそのためであろう。

与していたことも興味深い事実である。この意味で、彼らは、決してフリュギア地方の土埃の舞う大地しか知らぬ田舎貴族ではなく、都の政情や同時代の国際情勢についても充分な情報を有するエリート集団であったと考えられる。

ボタネイアテスを支持して反乱の兵を挙げ、首都への進軍を開始した人々は、それ以前に政権内で枢要な地位を占めていたことを忘れてはならない。それは、最終的に反乱の成否に重大な意味をもつことになるからである。

(3) 首都進軍

さて、ボタネイアテスを対立皇帝に擁立し、中央政府に対する反抗の意を鮮明にしたフリュギア貴族たちにとって、さしあたり、採りうべき道は次の２つしかなかった。

ひとつは、東南部国境地帯のフィラレトス･ブラカミオスや、アルメニアコンでのルーセル・ド・バイユールが企てたように、中央から自立した領域支配権を彼らの本拠地一帯に樹立することである。

そしてもうひとつは、1057 年にイサキオス･コムネノスが、あるいはさらに古くは､ボタネイアテスが祖と仰ぐニケフォロス･フォーカスが 963 年に行ったように、軍勢を率いて都に攻め上がることである。

結果から見れば、ボタネイアテスを支持するフリュギア貴族たちの中には、上述したトパルケスのブルツェスのように､第一の路線を選択した者もいたものの、大多数は一路、都へ進軍することを選んだのであった。

そうした決断は、ルーセルのような外国人でも、フィラレトスのような辺境の異民族出身でもなく、長期にわたって皇帝宮廷の周辺で広範な権力を揮ってきた名門貴族を多く含むフリュギア系諸家門には自明のことだったのかもしれない。

だが、そうだとしたら、彼らはなぜ、ゾンポス橋の会戦から３年もの間、公然と反乱に乗り出すことを思いとどまっていたのだろうか。

J.-C. シェネは､マンツィケルトの敗戦とそれに続く内乱でカッパドキア軍団が解体した結果、交通の要衝だったピシディア地方はすぐにその脅威に晒されたこと、これに対して中央政府が有効な対策をとれなかったこと、を指摘し、自己の所領防衛に危機感を募らせた貴族諸家門が仲間の一人を権力の座に就けようとして起こしたのがボタネイアテスの反乱に他ならない、と論じている。[61] この議

---

[61] J.-C.Cheynet, “La Pisidie entre Byzance et les Turcs seljoukides”, *Actes du Ier Congres Internationale sur Antioche de Pisidie,* Lyon,2001, pp.447-457, p.449. なお、ピシディアとは、フリュギアの東隣の地方である。

論が受け入れられるとすれば、ミカエル7世政権と前帝ロマノス4世との間の内乱が終結した1072年夏[62] 以降、反乱軍が挙兵する77年までの5年ほどの間に事態は耐えられぬほどに悪化していた、ということになるのだろうか。

M.アンゴールドも、1074～1077 年にかけてボタネイアテスがフリュギア地方の彼の本拠で暮らしていた時期、彼がこの地域の防衛の担い手になっていた、と考えている。[63] この間、彼も、ルーセルやフィラレトスのように、自己の本拠地で自立した支配権を樹立できるか模索を続けていた可能性もある。

だが、結局、最後には彼は軍勢を率いて故郷を離れ、首都へ上る道を選んだ。アンゴールドの言葉を借りれば、彼は「地方レヴェルの抵抗戦では帝国を救うことにならず、真の救済は中央でのみ実行可能である」と判断したのである。[64]

もっとも、ボタネイアテスは1077年10月初旬に反乱の兵を挙げ、公然と都の皇帝への叛意を示した後も、しばらくの間は彼の本拠を動かなかったらしい。というのも、1078年1月7日に首都の民衆が聖ソフィアに集まって、ボタネイアテスを皇帝として歓呼する、という事件が起きたとき、彼はまだ「東方属州の彼自身の町に留まっていた」とアッタレイアテスが報じているからである。[65]

どうやらこの間に、ボタネイアテスは都の内部に味方を広げるための工作を展開していたらしい。ブリュエンニオスが報じるところによれば、ボタネイアテスは首都の人々と密かに連絡を交わし、高官たちに対しては、彼の帝位奪取に協力すれば多大な褒賞や爵位を授けると約束していたという。[66]

アッタレイアテスも、同じ時期にバルカンで反乱を起こしていたニケフォロス・ブリュエンニオス（同名の史家の祖父）が圧力をかけるのに充分な軍事力を都の近くに擁しながら首都の人心を捉えることができなかったのに対して、そうした手段を行使できなかったボタネイアテスに熱烈な支持が集まったことを得意そうに報じることで、こうした工作があったことを言外に認めている。[67]

こうした首都内の反皇帝陰謀の動きについて、ミカエル7世の政権は一見した

---

[62] ロマノス4世が最終的に降伏したのは、1072年6月である。 cf.P.Schreiner, *Die byzantinische Kleinchroniken,* 2 vols, Wien, 1975-1977, vol.1, p.167, vol.2, p.158

[63] M. Angold, *The Byzantine Empire 1025-1204: A Political History,* 2ed., London, 1997, p.119.

[64] *ibid.,* p.119.

[65] Michael Attaleiates,p.256.

[66] Nikephoros Bryennios, p.238f.

[67] Michael Attaleiates,p.257. アッタレイアテスは、即位したボタネイアテスのために彼の歴史を執筆しており、随所にボタネイアテスへの賛美が散見される。他方、ボタネイアテスのライヴァルであったブリュエンニオスに対しては、彼の態度は極めて冷淡である。

ところ、手をこまねいているばかりで一向に有効な処置をとれなかったようである。アッタレイアテスによれば、ミカエル7世帝は、まるで子供のように宰相ニケフォリツェスの監督下に置かれ、万事が後者によって取り仕切られる一方で、皇帝は現実から目をそむけ、「機械仕掛けや占星術、何かの前兆や儀式がかった予言に夢中になり、デマゴーグや迷信家に振り回される」有様だったという。[68]

あるいは、皇帝政府は、ボタネイアテスの反乱軍さえ始末できれば、首都内の騒擾を鎮圧するのは困難なことではない、と判断していたのかもしれない。そのために皇帝政府は、トルコ人傭兵部隊をニカイア近辺に派遣して反乱軍の首都接近を阻止する構えを見せると共に、当時、小アジアに姿を現していたセルジューク朝の王族スレイマンに使者を送り、莫大な贈与を約束して反乱軍の討伐を要請したのである。

一方、首都内の支持者獲得にある程度の手ごたえを感じたボタネイアテスは、いよいよ1078年初頭に都への進軍を開始した。その後、コテュアイオンからニカイアに至るまでの彼の行軍の状況について、アッタレイアテスとブリュエンニオスの記述の間には若干の齟齬があるので、その点をあらかじめ検討しておこう。

まず最初のポイントは、反乱軍は、どこで皇帝が派遣した軍勢と初めて遭遇したのか、という点である。

アッタレイアテスによれば、ニカイアを守っていたトルコ人傭兵隊はその任務を放棄してコテュアイオンでボタネイアテスと合流し、彼への奉仕を誓った、という。[69]

他方、ブリュエンニオスは、コテュアイオンでの皇帝方の傭兵部隊との遭遇と後者の帰順について一切語っていない。彼によれば、ボタネイアテスが皇帝方の軍勢と出会い、後者が戦わずして反乱軍に寝返る、という事件が起きるのはニカイア前面のことであり、それまでボタネイアテスは、皇帝の要請を受けたトルコ人部隊の追撃を恐れて、僅か300あまりの兵と共に、主街道をはずれ、夜の闇に紛れながら行軍していたのだという。[70]

次に、スレイマン配下のトルコ人部隊が交渉の後にボタネイアテスの陣営に転じた時期に関しても、それを反乱軍がニカイアに向かう途中のことと論じるブリュエンニオスと、ニカイア到着後とするアッタレイアテスの間には微妙な食い違いが存在している。[71]

---

68 *ibid.*, p.257.
69 *ibid.*, p.265.
70 Nikephoros Bryennios, pp.240-243.
71 Michael Attaleiates,p.266f; Nikephoros Bryennios, p.240f.

P．ゴーティエは、最初のポイントに関して、２人の史家の記述を整合させるために、ボタネイアテスはコテュアイオンで皇帝陣営から脱走したトルコ人傭兵部隊を配下に加えた後、ニカイアで別の皇帝方の軍勢[72] と対峙することになったのだ、と推定している。[73]

だが、こうした推論はかなり無理があるのではないだろうか。

もしも無理に２人の歴史家の議論を折衷させて、ボタネイアテスがコテュアイオンでトルコ人傭兵部隊を加えた後、ニカイア前面で 300 あまりの兵力しかなかったとしたら、彼は故郷を出たときにはほとんど従兵がない状態だった、と考えざるを得なくなる。しかし、前にも見たように彼が故郷のフリュギア地方から率いてきた軍勢は後に「コマテノイ」と呼ばれて活動しているのが確認できるから、この 300 の兵は彼本来の手勢だったと考えるべきだろう。

それでは、ボタネイアテスは当初の 300 の兵に加え、コテュアイオンでトルコ人傭兵隊を加えて兵力を増強したのだと仮定すれば、そうした事実は、彼は味方が寡勢なため敵を恐れて夜中に行軍した、というブリュエンニオスの記述といささか矛盾をきたす印象を与えることになるだろう。この点については、アッタレイアテスも、より婉曲的ながら、ニカイアに至るまでボタネイアテスは「用心深く、密かに街道をたどった」と語っている[74] から、彼がこの間、隠密行動をとっていたのは間違いないと思われる。だとすれば、この間に彼は充分な兵力を擁していなかった公算が高い、ということになる。

それゆえ、ボタネイアテスが皇帝方の軍勢と初めて出会い、後者が戦わずして反乱軍に合流する、という出来事が起きたのはニカイアの前面であった、というブリュエンニオスの記述が受け入れられるのであり、また、その軍勢とは、アッタレイアテスが報じている、ニカイア周辺を警備するために皇帝から派遣されたトルコ人傭兵部隊のことだった、と考えるのが妥当になるのである。

ここまでの議論が正しいとすれば、第二のポイントである、スレイマンの軍勢との同盟が成立した時期に関しても、答えを導き出すのは容易である。

ブリュエンニオスが報じるところによれば、ロマノス 4 世治下にビザンツに帰順していたトルコ人の首領クリュソクーロスが同胞のスレイマンとの仲介役を務

---

72 カジュダンはこの軍勢をニカイアの「在地封建領主の軍隊」だと想定している。同氏「10－12 世紀のビザンツの都市と農村」、ピグレフスカヤ他著、渡辺金一訳『ビザンツ帝国の都市と農村――4～12 世紀――』、創文社、1968 年、67－94 頁、77 頁を参照。

73 Nikephoros Bryennios, p.240,n.3.

74 Michael Attaleiates,p.265.

め、後者がボタネイアテス方に転じるのに大きく貢献したという。[75]

他方、同じブリュエンニオスは、その少し前の箇所で、ボタネイアテスが反乱のために兵を集めていた時期、クリュソクーロスは西方、つまりバルカン属州に滞在していたことを伝えている。[76]

彼が密かに海峡を渡ってボタネイアテスの軍に身を投じた可能性はゼロではないかもしれないが、自前の海上輸送手段を持たず、またビザンツ亡命以来の配下のトルコ人部隊を伴った状態で、皇帝政府の目を逃れて彼が反乱軍の陣営に走るのは容易なことではなかったに違いない。

従って、むしろ、彼は配下の部隊と共に、皇帝政府の命令に従って小アジア側に渡ったのだ、と考える方が蓋然性が高いと言えるだろう。しかも、我々は、ミカエル7世政府が、ニカイア防衛のためにトルコ人傭兵部隊を派遣したことを知っている。P.ゴーティエが推定している[77] ように、このトルコ人傭兵部隊の指揮官こそがクリュソクーロスだった、と考えれば、全体の辻褄が合うのである。

さらに、これまでの考察に従って、彼がボタネイアテスの陣営に合流したのはニカイアの前面であったとすれば、彼の仲介でボタネイアテスとスレイマンの同盟が成立するのはその後、つまりボタネイアテスがニカイアを押えた後のことだった、と考えられる。

かくして、以上の議論をまとめると、ボタネイアテスの行軍の状況は以下のようになるはずである。

第一段階は、コテュアイオンからニカイアまで。反乱軍の兵力は約 300。追撃するトルコ人の目を恐れ、主街道をはずれ、夜間に密かに行軍した。

第二段階は、ニカイアの前面。ここで反乱軍は、ミカエル7世の派遣したクリュソクーロス指揮下のトルコ人傭兵部隊と遭遇し、トルコ人部隊が反乱軍に合流した。

第三段階は、反乱軍のニカイア滞在。この時点でクリュソクーロスの仲介でボタネイアテスとスレイマンの間に同盟が成立した。この結果、反乱軍には多くのトルコ兵が加わり、兵力はかなり増強された。[78]

1078年3月には、反乱軍の先遣隊が首都対岸のカルケドンやクリュソポリスの近くに姿を現す。この間に「全ての沿海部の諸都市が、ボタネイアテス配下の歩

---

[75] Nikephoros Bryennios, p.240f.
[76] *ibid.,* p.238f.
[77] *ibid.,* p.240,n.3.
[78] アッタレイアテスは、「ボタネイアテスはローマ人の部隊を彼ら（＝トルコ人）と一緒に計算し、彼らを混ぜ合わせて軍団、軍隊を編制し、帝国領の対岸に派遣した」と報じている。Michael Attaleiates,p.279.

兵部隊の出現に歓迎の意を表した」のであり、アッタレイアテスが語るところによれば、それはピュラエ、プラエネトゥス、ニコメディア、ルフィニアナエといった都市であった。[79] 特にニコメディアの長官[80] は、ニカイア前面にまで出向き、ボタネイアテスに敬意を表したという。[81]

このように小アジア沿海部の諸都市が次々に反乱軍に帰順していったのは、決してボタネイアテスの個人的な人気が高かったことを示すものではない。むしろ、それは、有効な防衛策を講じられない中央政府に対する諸都市の失望と怒りを示すものであった。そうした都市民の感情は、たとえばルフィニアナエの町について、「帝都と近接していたため、ミカエル［7 世］の配慮や注意の下に置かれるということがなかったために、彼（＝ボタネイアテス）の歩兵部隊を市内に受け入れた」というアッタレイアテスの叙述[82] からも確認できるだろう。諸都市にとっては、中央政府が当てにならぬ以上、彼らが切実に必要としている外敵からの保護を提供してくれそうなボタネイアテスに望みをつなぐ他なかったのである。

それゆえ、ここで認められるのは、フィラレトス・ブラカミオスの支配下に入った帝国東南部国境地帯の諸都市や、ルーセル・ド・バイユールの保護を受け入れた小アジア北東部の諸都市の事例と同一の構図なのである。

しかし、その一方で、帝都にほど近い小アジア西部沿海地方において、中央政府の実効的な支配能力がほとんど失われていた、という事実は、事態の深刻さを感じさせる。

他方、ボタネイアテスの反乱軍がトルコ人勢力の協力を仰ぎ、後者のもつ武力を利用しようと画策したことは、ビザンツの小アジア支配にさらに大きな打撃を与えることになった。というのも、ボタネイアテスが反乱軍を率いて首都入城を果たした後、トルコ人たちは、彼の同盟者として、誰にはばかることもなく、帝都にほど近い小アジア西部地方に居座ることになったからである。この問題については、後でもう一度、触れることになるだろう。

(4) 首都の政治情勢

1 月 7 日の聖ソフィアにおけるボタネイアテスの歓呼事件の後、首都において

---

79 *ibid.,* p.268.
80 おそらく、同市に司令部を置くテマ・オプティマトイの長官であろう。 cf.C. Foss,*Survey of Medieval Castles of Anatolia II: Nicomedia,* London,1996,p.18.
81 Michael Attaleiates,p.268.
82 *ibid.,* p.268.

彼を支持する人々の動きが次第に活発になってくる。とりわけ、そうした活動を主導したのは、史書の伝えるところでは、帝都に滞在中の高位聖職者たちであった。彼らは総主教コスマス（在位 1075－1081）に働きかけ、ボタネイアテスを皇帝に宣言させようとした。[83]

V.グリュメルは、総主教が教会会議を主宰し、そうした宣言を公式に行った、と解釈している[84]が、もともとドゥーカス家と親密な関係にあった総主教[85]がどれほど能動的にこうした運動に加わったのか、また、果たしてこうした宣言が本当に公式に発表されたのか、に関して、アッタレイアテスの記述を読む限りでは疑問符が付きそうである。

そうしたなかで反皇帝派の急先鋒だったイコニオン府主教は、民衆を聖ソフィアに集め、市民蜂起を煽動する、という直接行動に出た。この暴動は皇帝政府によって武力で鎮圧されたが、反対派をさらに刺激するのを恐れたためか、首謀者は処罰を免じられたという。[86]

フェニキア地方アスカロンという帝国外の異郷の地を故郷とする、この逸名のイコニオン府主教[87]が、なぜ反皇帝派の先頭に立つことになったのか、については、皇帝の失政に対する不満や腐敗した政府首脳への怒り、といった漠然とした理由を除けば、詳しい事情は分からない。ただ、彼の座所であるイコニオンの町はすでに 1069 年にトルコ人の襲撃を受けており[88]、当時、彼は小アジアに座所を持つ他の多くの高位聖職者たちと同様、帝都での避難生活を余儀なくされていた、

---

83 *ibid.,* p.258.

84 V.Grumel,*Les Regestes de Actes du Patriarchat de Constantinople,I,Les actes des Patriarches,* fasc.,3,Paris,1947,no.908,p.28.

85 アンナ・コムネナは、総主教とカイサル、ヨハネスが長期にわたって固い友情で結ばれていた、と語っている。 Anna Komnene, ed.,D.R.Reinsch & A.Kambylis,p.86; Anne Comnène, éd., B.Leib et P.Gautier,vol.1,p.100. 一介の修道士に過ぎなかった彼が、ミカエル 7 世治下に総主教に抜擢されたことは、彼とドゥーカス家との深い結び付きを抜きにして理解することはできない。 cf. B.Skoulatos,*Les personages byzantins,* pp.165-167.

86 Michael Attaleiates,p.258f; cf.A.Kazhdan,"The Social View of Michael Attaleiates", in A.Kazhdan,*Studies on Byzantine Literature of the Eleventh & Twelfth Centuries,* Cambridge,1984,pp.23-86,p.75f.

87 P.ゴーティエは、1082 年 3 月のイタロス裁判に加わっているイコニオン府主教イサイアを、今回の人物と同定しようとしている。 P.Gautier,"Les Synode des Blachernes (fin 1094). Étude prosopographique",*Revue des Études byzantines,* 29,1971,pp.213-284,p.266 ; L.Crucas,*The Trial of John Italos and the Crisis of Intellectual Values in Byzantium in the Eleventh Century,* München, 1981, p.21.

88 Michael Attaleiates,p.136; C.Cahen,"La première pénétration en Asie-Mineure",*Byzantion,* 18,1946-1948,pp.5-67,p.27.

と思われる[89] ため、彼が、彼の町イコニオンから遠くないフリュギア地方に本拠をもつ有力な軍事貴族ボタネイアテスを、小アジア回復の救世主として期待したことは充分に考えられることである。

他方、首都におけるもう一人の反皇帝派のリーダー、アンティオキア総主教のアイミュリアノスに関しては、その動機を説明するのはさほど難しいことではない。

ブリュエンニオスが語るところによれば、アイミュリアノスは、ミカエル7世政権の大立者ニケフォリツェスと以前から犬猿の仲だったという。[90] ニケフォリツェスはコンスタンティノス10世治下（1059－1067）にアンティオキア長官に就任しているから、両者の不仲はおそらくその時期まで遡るものと思われる。[91]

ミカエル7世政権の発足後、アイミュリアノスはアンティオキアの民衆煽動者としてニケフォリツェスに危険視され、後者の意向によって彼の町を去り、帝都で暮らすことを余儀なくされていただけに、今回の騒動は、彼にとって、これまでの鬱憤を晴らす絶好の機会となったのである。[92]

また、彼は、ニケフォリツェスの後にアンティオキア長官を務めたボタネイアテス[93] と面識があったのは確実であり、その頃に両者の間に結ばれた良好な関係が、アイミュリアノスが首都でボタネイアテスのために政治的活動を展開する上で大きな動因になったことは間違いないと思われる。

以上の2人に加え、史書に明示されてはいないものの、首都で反皇帝運動を主導した高位聖職者グループの中にはシデ府主教ヨハネスの姿があった可能性が高

---

89 この時期、小アジアから避難した高位聖職者たちが首都に長期滞在し、一種の政治的圧力集団を成したことについては、以下の文献を参照のこと。H.-G.Beck, "Kirche und Klerus im staatlichen Leben von Byzanz", *Revue des Études byzantines,* 24, 1966, pp.1-24 ,p.23; V.Tiftixoglu, "Gruppenbildung innerhalb konstantinopolitanischen Klerus während der Komnenzeit", *Byzantinische Zeitschrift,* 62, 1969, S.25-72, S.27-28.

90 Nikephoros Bryennios, p.202f.

91 *ibid.,* p.203,n.4; V.Laurent,"La chronologie des gouvernurs d'Antioche, sous la seconde domination byzantine",*Mélange de l'Université Saint-Joseph,* 38/10, 1962,pp.221-254,p.244f. ニケフォリツェスのアンティオキア長官時代の印章が現存している。 N.Oikonomides,*A Collection of Dated Byzantine Lead Seals,* Washington, D.C.,1986,no.93,p.91.

92 Nikephoros Bryennios, pp.200-205; V.Grumel, "Le patriarchat et les patriarches d'Antioche sous la seconde domination byzantine (969-1084)", *Échos d'Orient,* 33, 1934, pp.129-147, p.144f ; K.-P. Todt, "Region und griechisch-orthodoxes Patriarchat von Antiocheia in mittelbyzantinischer Zeit", *Byzantinische Zeitschrift,* 94, 2001, S.239-267, S.261.

93 V.Laurent,"La chronologie des gouvernurs d'Antioche", p.246; H.-J.Kühn, *Die byzantinische Armee im 10. und 11.Jahrhundert. Studien zur Organization der Tagmata,* Wien,1991,S.178.

い。というのも、発足当初のミカエル7世政権で実質的な宰相の役割を果たしていた彼は、当時、その地位をニケフォリツェスに奪われていたからである。[94] しかも、後にボタネイアテスが皇帝に即位すると、彼は宰相の地位に返り咲いているのである。[95] ニケフォリツェスとの権力闘争に敗れた彼が、ボタネイアテスを首都に受け入れるための活動に積極的に関与し、新政権の成立後、その報酬を手にしたことに疑問の余地はない。

こうした高位聖職者たちの積極的な奮闘ぶりと比べると、本来、帝都における政治行動の中心にあったはずの元老院議員たちの存在感はいささか印象が希薄なことは否めない。ブリュエンニオスによれば、アンティオキア総主教アイミュリアノスの主導する反皇帝陰謀には「多くの元老院議員が与同していた」のだが、その中で名前が挙げられているのは、「思慮深く、経験において多くの人々を凌ぐ人物」ミカエル・バリュス一人にすぎないのである。[96]

バリュス家は、10世紀初頭に登場する家系で、当初は軍人としての活動が目立つ[97] が、11 世紀半ば頃には文官家系に転じ、11 世紀後半以降の同家の成員はほとんどが文官と教会人で占められている。[98]

---

[94] Ioannes Zonaras, *Epitome Historiarum,* III, ed.,Th.Büttner-Wobst, Bonn, 1897,p.707f.

[95] *ibid.,* p.725; J.Gouillard,"Un chrysobulle de Nicéphore Botaneiatès à souscription synodale", *Byzantion,* 29/30, 1959/60, pp.38-41, pp.29-41.

[96] Nikephoros Bryennios, p.244f.

[97] 919年、ミカエル・バリュスは、反乱者レオン・フォーカスを逮捕する任務を託されている。また、彼の息子のコンスタンティノスは、中央軍団のひとつ、ヒカナトイの長官だった。Ioannes Skylitzes,p.210f ; cf.J.F.Haldon,*Byzantine Praetorians : An Administrative, Institutional and Social Survey of the Opsikion and Tagmata, c.580-900,* Bonn, 1984, p.357; J.-C.Cheynet, "Les Phocas", dans G.Dagron et H.Mihăescu,*Le traité sur guerilla (De velitatione) de l'empereur Nicéphore Phocas (963-969),* Paris,1986,pp.289-315,p.296.

また、11世紀前半のものと推定される「ミカエル・バリュス、プロートスパタリオス、タクシアルケス（歩兵千人隊長）」という印章も現存している。 Ch. Stavrakos, *Die byzantinischen Bleisiegel mit Familiennamen aus der Sammlung des Numismatischen Museums Athen,* Wiesbaden, 2000, Nr.36, S.96-97.

[98] 「コンスタンティノス・バリュス、オスティアリオス」（11 世紀第 4 四半期。オスティアリオスは高官が皇帝や皇后に謁見する際の案内役。後に名誉称号化してノタリオスやプロートノタリオスらの文官にしばしば付与された。ダンバートン・オークス研究所所蔵未刊行印章、D.O.58,106,1693. cf. Ch. Stavrakos, *Die byzantinischen Bleisiegel,* S.95）;「コンスタンティノス・バリュス、プロートヴェステス、プロートノタリオス」（1088年。E.Vranoussi ed.,*Βυζαντινά 'έγγραφα της μονης Πάτμου,* A',Athens,1980,p.345）;「コンスタンティノス・バリュス、プロートプロエドロス、シュンポノス」（11世紀末－12世紀初頭。シュンポノスは、首都長官の補佐官。 V.Laurent,*Le corpus des sceaux de l'empire*

印章資料から復元されるミカエル・バリュスの経歴[99] も、こうした家系の伝統に一致している。彼は、地方行政・徴税業務を振り出しに順調に中央官庁幹部、首都法廷の判事へと栄進しているのである。スタヴラコスは、おそらくブリュエンニオスが彼に何の肩書も付さずに言及している点に着目してのことと思われるが、彼のキャリアをボタネイアテスの即位以後にスタートするかのように時代画定を行っている。[100] しかし、今回の反乱事件に際して、彼が「経験豊か」と称されていたのを鑑みれば、彼はすでにマギストロス程度の地位には達していた、と考えるべきだろう。また、もしも彼がブケラリオン判事職をボタネイアテスの反乱以前に務めていたとしたら、アナトリコン長官時代の後者と親交があったことも想像される。[101] ただし、彼が、ボタネイアテス政権を打倒したアレクシオス

---

byzantin,II: administration centrale, Paris,1981,no.1085,p.597f)

「(ヨハネス？・) バリュス、バシリコス・スパタロカンディダトス、アセクレティス (皇帝秘書官) かつカルトゥラリオス・トゥ・ストラティオティクウ・ロゴテジウ (軍隊財務次官)」(11 世紀。V.Laurent,*Le corpus des sceaux ,II,* no.574,p.286.) ;「ヨハネス・バリュス、プロートプロエドロス、テイコーテス」(11 世紀末。テイコーテスは、宮殿囲壁警備隊長。宮殿内のカルケー監獄の管理も担当していた。Ch. Stavrakos, *Die byzantinischen Bleisiegel*, S.96)

さらにトラヤノポリス府主教のミカエル・バリュス (おそらく、今回登場したミカエルとは同名異人) の存在が知られている。 J.Nesbitt and N.Oikonomides ed.,*Catalogue of Byzantine Seals at Dumbarton Oaks and in the Fogg Museum of Art,* vol.1,Washington,D.C.,1991,p.147.

バリュス家が軍人から文官へと転身した契機となった事件として、コンスタンティノス 9 世治下 (1042－1055) のコンスタンティノス・バリュス (官位官職は不詳。10 世紀初頭と 11 世紀末の同名の人物とは明らかに別人) の陰謀事件を想定することができるかもしれない。このとき、彼は帝位を狙ったが、企ては失敗し、政界から失脚した。 cf.*Vie de Saint Lazare le Galésiote, Acta Sanctorum Nov.III,* Bruxelles, 1910, p.540 ; R.P.H.Greenfield ed.,*The Life of Lazaros of Mt.Galesion,* Washington,D.C., 2000, pp.196-198; J.-C.Cheynet, *Pouvoirs et contestations,* p.64f.

[99] cf. Ch. Stavrakos, *Die byzantinischen Bleisiegel*, Nr.35,S.93-96.

i)「プロートスパタリオス、エクサクトール (徴税官)、「エーゲ海」の判事」

ii)「マギストロス、メガス・カルトゥラリオス (税務庁ないし軍隊財務庁次官)、ヒッポドロームとブケラリオンの判事」

iii)「プロエドロス、ヴェーロンの判事、コイアイストール (司法長官)」

iv)「クロパラテス」

v)「プロートクロパラテス」(1094 年末)

i) ii): V.Pennas,"Byzantine Lead Seals from Chios and Lesbos",in N.Oikonomides ed.,*Studies in Byzantine Sigillography,* 2, Washington, D.C., 1990, pp.163-170,p.170; iii): V.Laurent,*Le corpus des sceaux ,II,* no.1113,p.616f; iv): Ch. Stavrakos, *Die byzantinischen Bleisiegel*, Nr.35,S.93-96; v): P. Gautier,"Les Synode des Blachernes",p.247.

[100] Ch. Stavrakos, *Die byzantinischen Bleisiegel*, S.94.

[101] これに対して、シェネは、ミカエル・バリュスのマギストロス昇進はボタネ

1 世の下でも栄達を重ねていたところを見れば、彼とボタネイアテス一派との結び付きはさほど強固なものではなかったのかもしれない。[102]

さて、3月に入り、ボタネイアテス配下の軍勢が首都対岸のクリュソポリスやカルケドンに現れると、いよいよ首都内の情勢も緊迫の度合いを増していった。

アッタレイアテスによれば、多くの人々が首都から海峡を渡ってニカイアのボタネイアテスの本陣に押し寄せ、彼の首都進軍に加わったという。[103]

他方、都の中でもボタネイアテスの接近に呼応して武装蜂起を実行する計画が進行していた。ブリュエンニオスはその状況を以下のように伝えている。

「　ボタネイアテスの到着が帝国との人々にも知られ、ニカイアの町が彼を大歓迎して迎えたとき、すぐに全ての元老院議員と多くの聖職者たちが対話と謀議を重ね、いかにして現在の統治者を片付け、自分たちの皇帝としてボタネイアテスを擁立するかについて考えをめぐらせることになった。というのも大半の人々は彼と密かに手紙をやりとりし、黄金印璽文書を受け取っていたからである。今や彼らは、名高い「神の叡智（トゥ・テウ・ソフィア）」の教会に集まり、彼らの周囲（ホイ・ペリ・アウトゥス）の人々（＝従者たち）を武装させ、囚人を牢獄から解放する一方で、この謀議に加わっていない高位の人々に書状を送って、共同行動に加わるよう呼びかけることに決めた。」[104]

蜂起決行の前夜、すなわち、1078 年 3 月 24 日の夜半、反皇帝派は、皇帝ミカエル 7 世の叔父でカイサルのヨハネス・ドゥーカスを陰謀に巻き込むことを目論み、彼の許に前述のミカエル・バリュスを使者として送り込んだ。バリュスは、協力の代価として多大な褒賞を約束したボタネイアテスの黄金印璽文書を携えていたという。[105]

だが、予想に反してカイサルは陰謀への加担を拒み、そうした計画はロゴテテースのニケフォリツェスと皇帝の知るところとなった。対策を協議する場に加わ

イアテス即位時のことと推定している。 J.-C.Cheynet,"La résistance aux Turcs en Asie Mineure entre Mantzikert et la Première Croisade", dans *EYΨYXIA: Mélange offerts à Hélène Ahrweiler,* Paris,1998,pp.131-147,p.138,n.39.

102 ボタネイアテスの支持者の多くは、同帝が失脚した際、新しい皇帝のアレクシオス 1 世によって財産を没収されたらしい。 cf.P.Gautier,"Le dossier d'un haut fonctionnaire d'Alexis Comnène : Manuel Straboromanos", *Revue des Études byzantines,* 23,1965,pp.168-204.

103 Michael Attaleiates,p.269.

104 Nikephoros Bryennios, pp.242-245.

105 *ibid.,* p.244f. カイサルは、政権内の主導権を完全にニケフォリツェスに奪われ、フランク人ルーセルの反乱時の不手際もあって、今や権力から疎外されていたために、反皇帝派に寝返る可能性は充分ある、と判断されたのだろう。

ったアレクシオス・コムネノスは、即刻、首謀者たちを逮捕するように主張する。カイサルとロゴテテースもそれに賛同した。しかし、皇帝は夜遅くに都で騒乱が起きるのを懸念して、逮捕を実行するのは朝まで待つよう指示を下した。[106] 結果的には、こうした行動の遅れが政権にとって致命的になった。

翌3月25日の早朝、反皇帝派は自分たちの奴隷(テラペウティコス)や家人(オイケティコス)を武装させて聖ソフィアに結集、ボタネイアテスを皇帝として歓呼して、ミカエル7世政権打倒のための武装蜂起を開始した。彼らは市中の監獄から囚人を解放して、これを戦列に加えることで兵力増強を図ると共に、まだ態度を明確にしていない高官たちに使者を送って、自分たちに加担するよう迫った。ブリュエンニオスによれば、彼らが送り付けた書状には次のように記されていたという。

「　最も神聖なる総主教たち、教会会議ならびに元老院は、汝をいとも名高き「神の叡智」の教会に召喚せり。」[107]

こうした呼びかけに対して、「ある人々は自発的に、また他の人々は不承不承に集まってきた。」[108]

聖ソフィア聖堂の中ではアンティオキア総主教の主宰の下に「元老院の選り抜きの人々が、大いなる天空に立ち昇る賛歌を聖職者団と唱和し、…全ての聖職者がこれに合意し、アゴラの人々や修道士(ナジライオイ)の中で最も令名の高い人々もそれに倣った。」[109] 多くの民衆を加え、勢いを増した反皇帝派は、聖ソフィアに隣接する大宮殿を攻撃してこれを占拠した。[110]

この間、皇帝ミカエル7世は首都北西部のブラケルナエ宮殿にあって、深刻化しつつある事態にどう対処すべきか決断を迫られていた。

皇帝の諮問を受けたアレクシオス・コムネノスは再度、強硬手段に出ることを建議した。彼は、集まっている群集の大半は「戦を知らぬ、手仕事をしているような連中」であるから、戦意に燃えた完全武装の兵士たちを目にしたらひとたまりもないはずだ、と語って、皇帝近衛隊のヴァリャーグ人部隊を武装させ、一人の将軍に率いさせて彼らの許に差し向けるべきだと主張したのである。[111]

---

106 *ibid.*, p.244f.
107 *ibid.*, p.246f. 「総主教たち」とここで複数形が用いられているのが事実だとすれば、アンティオキア総主教アイミュリアノスだけではなく、コンスタンティノープル総主教コスマスも、この時点で反皇帝派に加わっていたと考えざるを得ない。
108 *ibid.*, p.246f.
109 Michael Attaleiates,p.270.
110 *ibid.*, p.271.
111 Nikephoros Bryennios, p.246f.

しかし、この献策は皇帝の容れるところとはならなかった。彼は都でさらに大量の流血が生じることよりも、自ら退位することを選んだのである。彼は次善の策として、弟のコンスタンティオスを後継者に擁立することを望んだが、この計画は、敢えて火中の栗を拾う気のない後者によって拒まれ、頓挫した。[112]

3月30日、ミカエル7世は帝位を降りて修道衣をまとい、ブラケルナエ宮殿を出てストゥディオス修道院に入った。[113]

これに先立ち皇弟コンスタンティオスとアレクシオス・コムネノスは、首都対岸のボタネイアテスの陣営に赴き、自発的に新体制に帰順することを申し入れ、他方、ロゴテテースのニケフォリツェスとメガス・ヘタイレイアルケスのダヴィドは、もう一人の反乱者ニケフォロス・ブリュエンニオスの軍と対峙して、マルマラ海沿岸のヘラクレイアの町に陣を敷いていたフランク人傭兵隊長ルーセルの許に落ちのびた。[114]

かくしてミカエル7世政権は崩壊し、反皇帝派が首都を制圧した。彼らはボタネイアテスの軍が入城するまでの3日間、都の全権を掌握する。

首都の政変を確認したボタネイアテスは、まず腹心のボリロス[115]に率いられた先遣隊を送って皇帝宮殿を接収させた後、彼自身は4月3日に都に入って正式に皇帝の位に就いた。[116] ここにニケフォロス・ボタネイアテスの反乱は成功裏に終結したのである。

(5) 小 括

帝位に付いたボタネイアテスは、修道院に入った先帝ミカエル7世の妃マリア・アラニアと結婚するなど、前政権の関係者と融和を図る一方で、彼と共に首都に入った僚友たちに高位の官位・官職を授与することで、彼らの協力に謝意を

---

112 *ibid.,* p.248f; D.I.Polemis,*The Doukai: A Contribution to Byzantine Prosopography,* London,1968,p.50f.

113 *ibid.,* pp.250-253; Michael Attaleiates,p.270.

114 Nikephoros Bryennios, pp.248-251; Michael Attaleiates, p.271; Ioannes Zonaras,p.720. フランク人傭兵隊長ルーセルは、小アジアでの冒険が失敗して捕らえられた後、首都の牢獄に幽閉されていたが、これより少し前に反乱軍と戦うために解放されていた。

115 ボタネイアテスの最も信頼厚い家人 (Nikephoros Bryennios, p.249,l.14; "'ἑνα των πιστοτάτων αὑτω(=ボタネイアテス) οἰκετω")。ブリュエンニオスは、彼を「スキタイ人ないしミシュア人」と呼んでおり、おそらくブルガリア系だったと思われる。cf.Gy.Moravcsik,*Byzantinoturcica,II,* 3Aufl.,Leiden,1983,p.95f, p.111; B.Skoulatos,*Les personages byzantins,* pp.47-49.

116 Nikephoros Bryennios, pp.248-251.

表した。先に挙げた反乱の支持者たちが、この時期に獲得した地位を、印章資料から得られる知見で補いつつ、爵位の高い順に列挙すれば以下のようになる。

1．テオドゥロス・シュナデノス、ノベリシモス[117]
2．ヨハネス・グーデレス、ノベリシモス[118]
3．ニケフォロス・シュナデノス、クロパラテス[119]
4．アレクサンドロス・カバシラス、(クロパラテス？)、スコピエ長官[120]
5．ロマノス・ストラボロマノス、プロートプロエドロス、メガス・ヘタイレイアルケス[121]
6．ボリロス、プロートプロエドロス、エトナルケス（外人傭兵隊長）[122]

反乱成功を機に、ボタネイアテスの支持者たちは帝都に生活の場を移したと考えて間違いはないだろう。[123]

彼らの内でストラボロマノスは、ボリロスと共に、皇帝の身辺警護に責任を負う立場にあったから、常に宮廷で皇帝の側近くに仕えていたはずである。アレクサンドロス・カバシラスはバルカン地方の属州長官に任じられているから、彼も故郷に戻ることはなかったことになる。

ボタネイアテス帝の義兄弟テオドゥロス・シュナデノスは総じて影が薄いが、ノベリシモスという皇族格の高い爵位を帯びていること、息子のニケフォロスがボタネイアテスの後継者に擬されていたこと[124]、あるいはハンガリー王に嫁して

---

117 В.С.Шандровская,"Печати представителей рода Синадинов в Эрмитаже", *Византийский Временик,* 51,1990,стр.174-182, стр.178.
118 G.Schlumberger,*Sigillographie de l'empire byzantin,* p.549.
119 В.С.Шандровская,"Печати представителей рода Синадинов", стр.176.
120 Skylitzes Continuatus,p.185. アレクサンドロス・カバシラスの現存する印章の爵位は、いずれもノベリシモスである。W.Seibt,*Die byzantinische Bleisiegel in Österreich,1,*Nr.125,S.257-258. 彼は、アレクシオス１世帝の下でもキャリアを継続させているので、ボタネイアテス治下には１ランク下のクロパラテス程度の地位にあった、と推測しておく。
121 Michael Attaleiates,p.286.
122 Nikephoros Bryennios, p.283. ボリロスには、「プロエドロス、メガス・プリミケリオス・トーン・エトニコーン」という印章も現存している。 В.С. Шандровская, "Некоторые исторические деятели 《Алексиады》 и их печати", *Палестинский Сборник* , 23-86, 1976, стр.28-45, стр.29-34. ここで挙げられている官職名は、史料中の「エトナルケス」と事実上、同一のものであろう。
123 先にも述べたように、ボタネイアテスが率いて都に入った軍勢は、「コマテノイ」と呼ばれ、その後もバルカンの軍事作戦に投入されているから、そのまま首都に留まっていたものと思われる。 cf. Nikephoros Bryennios, pp.264f,270-273.
124 Anna Komnene, ed.,D.R.Reinsch & A.Kambylis,p.57; Anne Comnène, éd.,

いた彼の娘が王の死去に伴い、帰国して宮廷に迎えられていたこと[125]、などを思えば、皇帝の最も有力な盟友の一人として宮廷で重きを置いていたことは想像に難くない。

かくして、この時期、ボタネイアテスを支持したフリュギア地方一帯の貴族たちは、前述のように現地に留まることを選んだトパルケスのブルツェスを除き、総じて彼らの故郷を捨てて、首都の宮廷生活を選んでいるのである。

彼らが立ち去った後、守護者をなくした当該地域の都市や農村は、以前にもましてトルコ人の脅威に晒されることになった。

そうした中で、一時、コス島に退いていたニケフォロス・メリッセノスが小アジア本土に舞い戻り、ボタネイアテスへの反乱を開始したことは、事態をいっそう悪化させただけであった。

ブリュエンニオスの伝えるところによれば、メリッセノスは、トルコ人の首領たちを味方に付け、皇帝として緋色の沓をはいて、小アジアの諸都市を巡歴したという。すると、今回もまた、諸都市は、この対立皇帝の軍勢を歓呼して門を開いた。[126] 都市住民にとっては、ボタネイアテスであれ、メリッセノスであれ、自分たちのそばで外敵から守ってくれそうな存在ならば、誰でもよかった、ということなのだろう。

ところが、メリッセノスは、おそらく手勢が少なかったせいであろうが、こうした都市を残らず同盟者のトルコ人に引き渡してしまったのである。その結果、「こうした手口で、短期間のうちにアシア、フリュギア、ガラティアの全ての都市をトルコ人が支配するような状況になってしまった。」[127]

カーエンが指摘しているように、当時、堅固な囲壁を備えた都市は、攻城兵器をもたないトルコ人には容易に攻略できる代物ではなかったはずである。[128] ところが、彼らは、反乱を起こしたビザンツ貴族の同盟者として、戦火を交えることなく、易々とそれらの都市の中に入り込んだのである。[129] そして、こうした貴

B.Leib et P.Gautier,vol.1,p.66; J.-C.Cheynet, *Pouvoirs et contestations*, p.89 ; Ch.Hannick und G.Schmalzbauer, "Die Synadenoi",Nr.6.S.129.

125 Skylitzes Continuatus, p.185; J.Shepard, "Byzantium and the Steppe-Nomads" ,pp.72-83.

126 Nikephoros Bryennios, p.300f.

127 *ibid.,* p.300f.

128 C.Cahen,"La première pénétration en Asie- Mineure",p.43.

129 J.-C.シェネも、小アジア領喪失におけるメリッセノスの責任の重大さを指摘している。J.-C.Cheynet, "La conception militaire de la frontiere orientale (IXe -XIIIe siècle)", in A.Eastmond ed.,*Eastern Approaches to Byzantium,* Aldershot, 2001, pp.57-69, p.65.

族たちが都を目指して攻め上がっていった後、守備隊として残された彼らは事実上、彼らが進駐した都市の支配者として威を揮うことになったのである。彼らは名目的にはビザンツの同盟者の地位に留まったが、彼らが占拠する都市に対して、ビザンツ当局は実際には何の権利も行使することはできなかった。1070年代以降、小アジアにおいて急激にトルコ人の支配圏が拡大した背景には、自己の政治的野心を満たすために、彼らの武力を積極的に活用しようとしていたビザンツの有力貴族たちの無定見な行動があったことは銘記しておかねばなるまい。

Ⅳ　結びに代えて

これまでの考察をまとめ、ルーセル・ド・バイユールとニケフォロス・ボタネイアテスの２人の反乱を振り返って、本稿全体の総括を行いたい。

ここまでの考察を通じて、まず何よりも痛切に感じられるのは、この時期の小アジア社会を特徴付ける、トルコ人の跳梁と相次ぐ反乱によって出来した慢性的な社会不安と治安の混乱という現実である。最近、J.-C.シェネは、この時期、トルコ人は襲撃や掠奪を重ねてはいたが組織的に小アジアのビザンツ領を征服、占領していたわけではなく、ビザンツの行政機構はなおも強靭な耐久力を示していた、と論じる研究を公刊した。[1]　だが、この時代の小アジア情勢を語る史書の記述を読む限りでは、そうした主張を無理なく受け入れるのは困難であると言わざる得ない。[2]　あるいはシェネの言うように、末端におけるビザンツ行政組織はなおも機能し続けていたかもしれないが、それらとコンスタンティノープルの中央政府との連絡は随所に寸断され、中央の威令は決して地方の隅々にまでは及んではいなかったと思われるのである。

そうしたことは、今回の２つの反乱を分析する中で目撃された小アジアの都市住民たちの行動からも裏付けられるだろう。彼らは、いずれの場合にも、充分な保護の手を差し伸べようとしない中央政府を見限り、反乱者だが、身近に有用な武力を持った人物を歓迎している。前にも語ったように、彼らにとって重要なのは、目前の平和と安全だけであり、彼らに保護を及ぼそうとする権力者の地位が正当か否か、といった問題は取るに足らぬものだった、という印象が強い。そして、こうした武力を持った有力者の周囲に地域社会が結集した場合には、トルコ人の脅威にもかなり有効に対処しえたことは、アルメニアコンにおけるルーセルの領国建設の事例からも推察されるのである。

---

[1] J.-C.Cheynet,"La résistance aux Turcs en Asie Mineure entre Mantzikert et la Première Croisade", dans *EYΨYXIA: Mélange offerts à Hélène Ahrweiler,* Paris,1998,pp.131-147.

[2] この点に関し、シェネは、当時の情勢を語る３人の史家は、いずれもこの時代をことさらに悲惨なものとして描写するための動機があったのだと論じている。すなわち、アッタレイアテスは、ボタネイアテスの支持者だったから、後者の反乱を正当化するためにミカエル７世の失政を強調する必要があり、また、ニケフォロス・ブリュエンニオスも、ミカエル７世に対して反乱を起こした祖父の行動を正当化するために同じ態度をとっているのだという。他方、アンナ・コムネナには、彼女の父アレクシオス１世の治世の最初の 10 年間の劣悪な状況の責任を彼の前任者たちに負わせる必要があったのだとされる。J.-C.Cheynet,*Pouvoirs et contestations à Byzance (963-1210),* Paris,1990, p.350.

同じように、地域の有力者が防備を施した都市や城塞に拠って、かなりの期間、トルコ人の攻撃を退けていた事例は、本稿でも触れたトパルケスのブルツェスなど、他に幾つも挙げることができる。[3] それゆえ、中央政府が、これらの半自立的な地方有力者の在地での支配権を追認し、それらに宗主権を認めさせ、孤立したそれらの領域支配権を相互に連携させるよう組織することができたなら、小アジアのビザンツ領の防衛体制が再強化されることも夢ではなかったのではないか、という思いが募るのである。

しかし、現実はそのようにはならなかった。最後に、小アジアにおけるビザンツ支配が急激に崩壊するに至った要因を確認しておこう。

結論から先に言えば、トルコ人の小アジア席巻が急速に進展した最大の理由は、ビザンツ人自身にあった。マンツィケルトの会戦以降、権力を巡って激しく争ったビザンツ内のあらゆる政治勢力が己の野心を満たすためにトルコ人の武力を利用しようとして彼らをビザンツ領内に招き入れた。失った皇位を取り戻すためにスルタンの武力介入を求めたロマノス4世、反乱したルーセルやボタネイアテスを討つためにトルコ人の協力を仰ぐことに何のためらいも見せないミカエル7世、そして、逆に反乱を成功させるためにトルコ人と喜んで同盟を結んだボタネイアテスやメリッセノス等等。

しかも、フランク人守備兵を城塞から追い出して地域の防衛組織を麻痺させたアレクシオス・コムネノスや、都市や城塞をトルコ人に委ねて首都へ進軍したメリッセノスなど、ことごとく打つ手が地域社会におけるビザンツ側の防衛体制を解体させ、トルコ人の支配権力を拡大させる方向に作用しているのだから始末が悪い。

ビザンツ人にとって、国内の強力な政敵を打ち破るために外部の異民族の武力を借りることは11世紀に始まったことではなく[4]、その限りで彼らは従来の行動規範に従っただけであり、そのことを近代ナショナリズムの洗礼を受けた現代人

---

[3] 1081年当時、ポントスのヘラクレイアを支配していたダバテノスや、トレビゾンドの町をトルコ人から奪還したテオドロス・ガブラスなど。 Anna Komnene, *Alexias,* ed.,D.R.Reinsch & A.Kambylis,Berlin,2001,p.110, p.255; Anne Comnène, *Alexiade,* éd.,B.Leib et P.Gautier, 4vols, Paris, 1937-1976, vol.1, p.131, vol.2,p.151. この他の事例については、J.-C.Cheynet, "La conception militaire de la frontiere orientale (IXe -XIIIe siècle)", in A.Eastmond ed.,*Eastern Approaches to Byzantium,* Aldershot, 2001, pp.57-69, p.65.を参照。

[4] たとえば、ビザンツ中期の最盛期を現出させたバシレイオス2世にしても、バルダス・スクレロスの反乱を鎮圧するためにタイクのグルジア系君侯の軍事介入を求め、さらにバルダス・フォーカスの乱を鎮めるのにキエフ・ルーシの援軍を用いている。拙稿「小アジア貴族の世界」30－32頁を参照。

の視点から非難するのは筋違いと言うべきかもしれない。しかし、こうした方策は、対象となる外部勢力に対してビザンツ側の軍事的優位性が保たれていた場合においてのみ有効に機能したのであり、そうした前提条件が成立していなかった1070年代以降のビザンツでは、破壊的な作用を及ぼすことになったのである。

この時期を画期として小アジア、とりわけ内陸台地におけるトルコ人支配は着実に進行することとなる。その後、彼らは勢力の消長を繰り返しながらアナトリアの大地に定着し、やがてオスマン朝の下で大きな発展を遂げることになった。その意味で、およそ400年後の帝国の滅亡の種はビザンツ人自身の手で蒔かれていたのだ、と語ることも可能だろう。

文　献　目　録

I　一次史料

1 Michael Attaleiates,*Historia,* ed.,I.Bekker,Bonn,1853.

2 Nikephoros Bryennios, *Historiarum libri quattuor,* éd.,P.Gautier, Bruxelles, 1975.

3 Anna Komnene,*Alexias,* ed.,D.R.Reinsch & A.Kambylis,Berlin,2001.

3' Anne Comnène,*Alexiade,*éd.,B.Leib et P.Gautier,4vols,Paris,1937-1976.

4 Michael Psellos,*Chronographie,*éd.,E.Renauld,2éd.,Paris,1967,2vols.

5 Ioannes Skylitzes, *Synopsis Historiarum,* ed., H.Thurn, Berlin, 1973.

6 Skylitzes Continuatus, *'Η Συνέχεια της χρονογραφίας* ,ed., E.T.Tsolakis, Thessalonike,1968.

7 Ioannes Zonaras, *Epitome Historiarum,* III, ed.,Th.Büttner-Wobst, Bonn, 1897

8 Ioannnes Kinnamos, *Epitome rerum ab Ioanne et Alexio [Manuele] Comnenis gestarum,*Bonn,1836.

9 P.Schreiner, *Die byzantinische Kleinchroniken,* 2 vols, Wien, 1975-1977.

10 Pseudo-Luciano,*Timarione,* a cura di R.Romano,Napoli,1974,p.57.

11 N.Oikonomidés éd.,*Actes de Docheiariou (Archieves de l'Athos XIII),*Paris, 1984.

12 E.Vranoussi ed.,*Βυζαντινά 'έγγραφα της μονης Πάτμου,* A',Athens,1980,

13 *Vie de Saint Lazare le Galésiote, Acta Sanctorum Nov.III,* Bruxelles, 1910. R.P.H.Greenfield ed.,*The Life of Lazaros of Mt.Galesion,* Washington,D.C., 2000,

14 E.Sargologos éd.,*La vie de Saint Cyrile le Philéote, moine byzantin,* Bruxelles,1964

II　印章資料

1 G.Schlumberger,*Sigillographie de l'empire byzantin,* Paris,1884 (Torino,1963).

2 G.Zacos & A.Veglery, *Byzantine Lead Seals,* vol.I,Basel,1972.

3 V.Laurent, *Documents de sigillographie byzantine. La collection C.Orghidan,* Paris,1952.

4 V.Laurent,*Le corpus des sceaux de l'empire byzantin,II: administration centrale,* Paris,1981,

5 W.Seibt,*Die byzantinische Bleisiegel in Österreich,1Teil: Kaiserhof,* Wien,

1978.
6 W.Seibt und M.L. Zarnitz,*Das byzantinische Bleisiegel als Kunstwerk. Katalog zur Ausstellung,* Wien,1997.
7 J.Nesbitt & N. Oikonomides, *Catalogue of Byzantine Seals at Dumbarton Oaks and in the Fogg Museum of Art,* vol.1,Washington,D.C.,1991.
8 J.-C.Cheynet,C.Morrisson et W.Seibt,*Les sceaux byzantins de la collection Henri Seyrig,* Paris,1991.
9 И.Иорданов, *Печатите от стратегията в Преслав (971-1088),* София, 1993.
10 Ch. Stavrakos, *Die byzantinischen Bleisiegel mit Familiennamen aus der Sammlung des Numismatischen Museums Athen,* Wiesbaden, 2000.
11 N.Oikonomides,*A Collection of Dated Byzantine Lead Seals,* Washington, D.C.,1986,
12 В.С. Шандровская, "Некоторые исторические деятели 《Алексиады》и их печати", *Палестинский Сборник* , 23-86, 1976, стр.28-45.
13 В.С.Шандровская, "Печати представителей рода Синадинов в Эрмитаже", *Византийский Временик,* 51,1990,стр.174-182.
14 V.Pennas,"Byzantine Lead Seals from Chios and Lesbos",in N.Oikonomides ed.,*Studies in Byzantine Sigillography,* 2, Washington, D.C., 1990, pp.163-170
15 J.-C.Cheynet, "Sceaux byzantins des musées d'Antioche et de Tarse", *Travaux et Mémoires,* 12, 1994, pp.391-478.

Ⅲ 研究文献

1 M. Angold, *The Byzantine Empire 1025-1204: A Political History,* 2ed., London, 1997.
2 N.Banescu, *Les duchés byzantins de Paristorion (Paradounavon) et de Burgarie,* Bucarest,1946.
3 H.-G.Beck, "Kirche und Klerus im staatlichen Leben von Byzanz", *Revue des Études byzantines,* 24, 1966, pp.1-24
4 L.Bréhier,"Les aventures d'un chef normand en Orient au XIe siécle, Roussel de Bailleul",*Revue des cours et conférence,* 1912,pp.172-188.
5 S.Blöndel & B.S.Benedikz,*The Varangians of Byzantium,* Cambridge,1978.
6 C.Cahen,"La première pénétration en Asie- Mineure",*Byzantion,* 18,1946-1948,pp.5-67.
7 P.Charanis,"Economic Factors in the Decline of the Byzantine Empire", *Journal of Economic History,* 13,1954,pp.412-424.
8 P.Charanis, "The Byzantine Empire in the Eleventh Century",in K.M. Setton ed., *A History of the Crusades,* vol.1, 2ed., Madison, 1969, pp.

177-219.
9 J.-C.Cheynet,"Mantzikert. Un désastre militaire?",*Byzantion,* 50,1980, pp.410-438.
10 J.-C.Cheynet,"Toparque et topotèrètes à la fin du XIe siècle",*Revue des Études byzantines,* 42,1984,pp.215-224.
11 J.-C.Cheynet,"Du stratège de theme au duc: chronologie de l'évolution au cours du XIe siècle", *Travaux et Mémoires,* 9,1985,pp.181-194.
12 J.-C.Cheynet,"Trois familles du duché d'Antioche", dans J.-C.Cheynet et J.-F.Vannier, *Études prosopographiques,* Paris.1986,pp.7-122 .
13 J.-C.Cheynet, "Les Phocas", dans G.Dagron et H.Mihăescu,*Le traité sur guerilla (De velitatione) de l'empereur Nicéphore Phocas (963-969),* Paris,1986,pp.289-315.
14 J.-C.Cheynet,*Pouvoirs et contestations à Byzance (963-1210),* Paris,1990.
15 J.-C.Cheynet,"L'anthroponymie aristocratique à Byzance",dans M.Bourin, J.-M.Martin et F.Menant éd., *L'anthroponymie : document et l'histoire sociale des mondes méditerranéens médievaux,* Rome,1996,pp.267-294.
16 J.-C.Cheynet,"Le rôle des Occidentaux dans l'armée byzantine avant la Première Croisade" in E.Konstantinou ed.,*Byzanz und Abendland im 10. und 11. Jahrhundert,* Köln,1997,pp.111-128.
17 J.-C.Cheynet,"La résistance aux Turcs en Asie Mineure entre Mantzikert et la Première Croisade", dans *ΕΥΨΥΧΙΑ: Mélange offerts à Hélène Ahrweiler,* Paris,1998,pp.131-147.
18 J.-C.Cheynet, "La Pisidie entre Byzance et les Turcs seljoukides", *Actes du 1er Congres Internationale sur Antioche de Pisidie,* Lyon,2001, pp.447-457,
19 J.-C.Cheynet,"La conception militaire de la frontière orientale (IXe – XIIIe siècle)",in A.Eastmond ed.,*Eastern Approaches to Byzantium,* Aldershot, 2001, pp.57-69.
20 L.Crucas,*The Trial of John Italos and the Crisis of Intellectual Values in Byzantium in the Eleventh Century,* München, 1981.
21 H.R.E.Davidson,*The Viking Road to Byzantium,* London,1976.
22 F.Dölger und P Wirth, *Regesten der Kaiserurkunden des oströmischen Reiches,* vol.2.2Aufl.München,1995.
23 N.D.Duyé, "Un haut fonctionnaire byzantin du XIe siècle : Basile Maléses", *Revue des Études byzantines,* 30,1972,pp.167-178.
24 W.Felix,*Byzanz und die islamische Welt im früheren 11,Jahrhundert,* Wien, 1980.
25 C. Foss, *Survey of Medieval Castles of Anatolia II: Nicomedia,* London, 1996.
26 A.Friendley,*The Dreadful Day: The Battle of Mantzikert,1071,* London, 1981.

27 P.Gautier,"Le dossier d'un haut fonctionnaire d'Alexis Comnène : Manuel Straboromanos", *Revue des Études byzantines,* 23,1965,pp.168-204.

28 P.Gautier, "La curieuse ascendance de Jean Tzetzes", *Revue des Études byzantines,* 28,1970,pp.207-220.

29 P.Gautier, "Les Synode des Blachernes (fin 1094). Étude prosopographique", *Revue des Études byzantines,* 29,1971,pp.213-284

30 H.Glykatzi-Ahrweiler, "Recherches sur l'administration de l'empire byzantine aux IXe-XIe siècle",*Bulletin de correspondance hellenique,* 84,1960,pp.1-109.

31 J.Gouillard, "Un chrysobulle de Nicéphore Botaneiatès à souscription synodale", *Byzantion,* 29/30, 1959/60, pp.38-41.

32 V.Grumel, "Le patriarchat et les patriarches d'Antioche sous la seconde domination byzantine (969-1084)", *Échos d'Orient,* 33, 1934, pp.129-147,

33 V.Grumel,*Les Regestes de Actes du Patriarchat de Constantinople,I,Les actes des Patriarches,* fasc.,3,Paris,1947.

34 R.Guiland,*Recherches sur les institutions byzantines,* 2vols,Amsterdam, 1967.

35 R.Guiland,"Patricienne à ceinture",*Byzantinoslavica,*32,1971,pp.269-275 (=R.Guilland,*Titres et fonctions de l'Empire byzantin,* London,1976, XXVI)

36 J.F.Haldon,*Byzantine Praetorians : An Administrative, Institutional and Social Survey of the Opsikion and Tagmata, c.580-900,* Bonn, 1984.

37 J.F.Haldon,*The Byzantine Wars. Battles and Campaigns of the Byzantine Era,* Stroud,2000.

38 Ch.Hannick und G.Schmalzbauer, "Die Synadenoi: Prosopographische Untersuchung zu einer byzantinischen Familie", *Jahrbuch der österreichischen Byzantinistik,*25,1976,S.125-161.

39 J.Hoffmann,*Rudimente von Territorialstaaten im Byzantinischen Reich (1071-1210),* München,1974

40 A.Hohlweg, *Beitrage zur Velwaltungsgeschichte des Oströmischen Reiches unter den Komnenen,* München,1965.

41 R.Janin,"Les <Francs> au service des Byzantins",*Echos d'Orient,* 29,1930, pp.61-72.

42 P.Karlin-Hayter,"L'hétériarque. L'évolution de son role du *De Ceremoniis* au *Traité des Offices*", *Jahrbuch der österreichischen Byzantinistik,* 23,1974,pp.101-143.

43 A.Kazhdan, "The Social View of Michael Attaleiates", in A.Kazhdan, *Studies on Byzantine Literature of the Eleventh & Twelfth Centuries,* Cambridge,1984,pp.23-86.

44 A.Kazhdan ed.,*The Oxford Dictionary of Byzantium,* New York - Oxford, 1991.

45 A.Kazhdan, "Latins and Franks in Byzantium: Perception and Reality from the Eleventh to the Twelfth Century",in A.E.Laiou and R.P. Mottahedeh, eds., *The Crusades from the Perspective of Byzantium and the Muslim World,* Washington,D.C.,2001,pp.83-100.

46 A.Koila-Dermitzaki,"MichaelVII Doukas,Robert Guiscard and the Byzantine-Norman Marriage Negotiations", *Byzantinoslavica,* 58,1997,pp.251-268.

47 H.-J.Kühn, *Die byzantinische Armee im 10. und 11.Jahrhundert. Studien zur Organi zation der Tagmata,* Wien,1991.

48 P.Lemele, "Byzance au tournant de son destin", dans P.Lemerle,*Cinq études sur le XIe siècle byzantin,* Paris,1977,pp.249-312.

49 Sp. Lambros,"Alexander Kabasilas",*Byzantinische Zeitschrift,* 12,1903, S.40-41

50 V.Laurent,"La chronologie des gouvernurs d'Antioche, sous la seconde domination byzantine",*Mélange de l'Université Saint-Joseph,* 38/10, 1962,pp.221-254.

51 P.Magdalino,"The Byzantine Army and the Land : From *Stratiotikon Ktemata* to Military *Pronoia*" ,in *Byzantium at War (9th – 12th c.),* Athens,1997,pp.15-36

52 Gy.Moravcsik,*Byzantinoturcica,II,* 3Aufl.,Leiden,1983

53 G.N.Nikolov,"The Bulgarian Aristocracy in the War against the Byzantine Empire", in G.Prinzig, M.Salamon & P.Stephenson ed.,*Byzantium and East Central Europe,* Cracow,2001,pp.141-158,p.144.

54 *The Normans in Europe,* Translated by E.van Houts,Manchester,2000.

55 N.Oikonomides,"The Donation of Castles in the Last Quarter of the 11th Century",*Polychronion. Festschrift Franz Dölger zum 75 Geburtstag,* Heiderberg,1966,pp.413-417.

56 N.Oikonomidès,*Les listes de préséance byzantines des IXe et Xe siècles,* Paris,1972.

57 G.Ostrogorsky,"Die Perioden der byzantinischen Geschichte",*Historishe Zeitschrift,* 163,1941,S.229-254.

58 G.Ostrogorsky, *Geschichte des byzantinischen Staats,* 3Aufl.,München, 1963,S.287-288 (邦訳：ゲオルグ・オストロゴルスキー著、和田廣訳『ビザンツ帝国史』、恒文社、2001 年、448 - 449 頁)

59 D. I. Polemis, "Notes on Eleventh- Century Chronology", *Byzantinische Zeitschrift,* 58,1965,pp.60-76.

60 D. I. Polemis, *The Doukai. A Contribution to Byzantine Prosopography,* London, 1968.

61 G.Schlumberger,"Deux chefs normands des armées byzantines au XIe siècle. Sceaux de Hérve et de Roussel de Bailleul",*Revue historique,* 16, 1881,pp.289- 303.

62 P. Schreiner, "Eine Schlacht bei Mylasa im Jahre 1079/80? Ein Beitrag zur Erforschung der Region von Milet",in *ΕΥΨΥΧΙΑ: Mélange offerts à Hélène Ahrweiler,* Paris,1998,pp.611-617.

63 J.Shepard, "The Use of the Franks in Eleventh-Century Byzantium", *Angro- Norman Studies,* 15,1993,pp.275-305.

64 J.Shepard, "Byzantium and the Steppe-Nomads: The Hungarian Dimension" ,in G.Prinzing und M.Salamon Hersg.,*Byzanz und Ostmitteleuropea,* Wiesbaden,1999,pp.55-83.

65 B.Skoulatos,*Les personages byzantins de l'Alexiade. Analyse prosopographique et synthèse,* Louvain,1980,p.120.

66 S.Stavrakas, *The Byzantine Provincial Elite. A Study in Social Relationships during the Ninth and Tenth Centuries,* Ph.D.thesis,The University of Chicago,1978

67 P.Stephenson, *Byzantium's Balkan Frontier: A Political Study of the Northern Balkans,900-1204,* Cambridge,2000.

68 V.Tiftixoglu, "Gruppenbildung innerhalb konstantinopolitanischen Klerus während der Komnenzeit", *Byzantinische Zeitschrift,* 62, 1969, S.25-72,

69 K.-P. Todt, "Region und griechisch-orthodoxes Patriarchat von Antiocheia in mittelbyzantinischer Zeit", *Byzantinische Zeitschrift,* 94, 2001, S.239-267

70 W.Treadgold, *A History of the Byzantine State and Society,* Stanford, 1997, p.607.

71 J.-F.Vannier,"Les premiers Paléologues. Étude génélogique et prosopographique", dans J.-C.Cheynet et J.-F.Vannier, *Études prosopographiques,* Paris.1986.

72 S.Vryonis,Jr.,*The Internal History of Byzantium during the 'Time of Troubles' (1057-81),* Ph.D.thesis,Harvard University,1956.

73 K.Yuzbashian, "L'administration byzantine en Arménie aux Xe- XIe siècles",*Revue des études arméniennes, N.S.,* 10, 1973-1974, pp.139-183.

74 カジュダン「10－12 世紀のビザンツの都市と農村」、ピグレフスカヤ他著、渡辺金一訳『ビザンツ帝国の都市と農村――4～12 世紀――』、創文社、1968 年、67－94 頁。

75 根津由喜夫「ライデストス穀物専売政策をめぐって――11 世紀ビザンツの国家と官僚――」、『史林』70 巻 1 号、1987 年、44－72 頁

76 同「10 世紀小アジア貴族の世界」、『古代文化』41 巻 2 号、1989 年、22－37 頁

77 同「11 世紀ビザンツ属州貴族と地域社会、皇帝政府――アドリアノープルとマケドニア貴族をめぐって――」、『歴史学研究』651 号、1993 年、46－59 頁

78 同「イサキオス 1 世とコンスタンティノス 10 世の治世をめぐって――過渡

期のビザンツ皇帝政権――」、『史林』80巻5号、1997年、1－37頁

79　同『ビザンツ 幻影の世界帝国』講談社、1999年

80　同「コムネノス家――11世紀ビザンツ軍事貴族家門の相貌――」、『金沢大文学部論集 史学・考古学・地理学篇』20号、2000年、1－41頁

81　同「ビザンツ属州行政と名望家層――コムネノス朝期のテッサロニケ地域を中心に――」、『金沢大学文学部論集 史学・考古学・地理学篇』21号、2001年、1－34頁